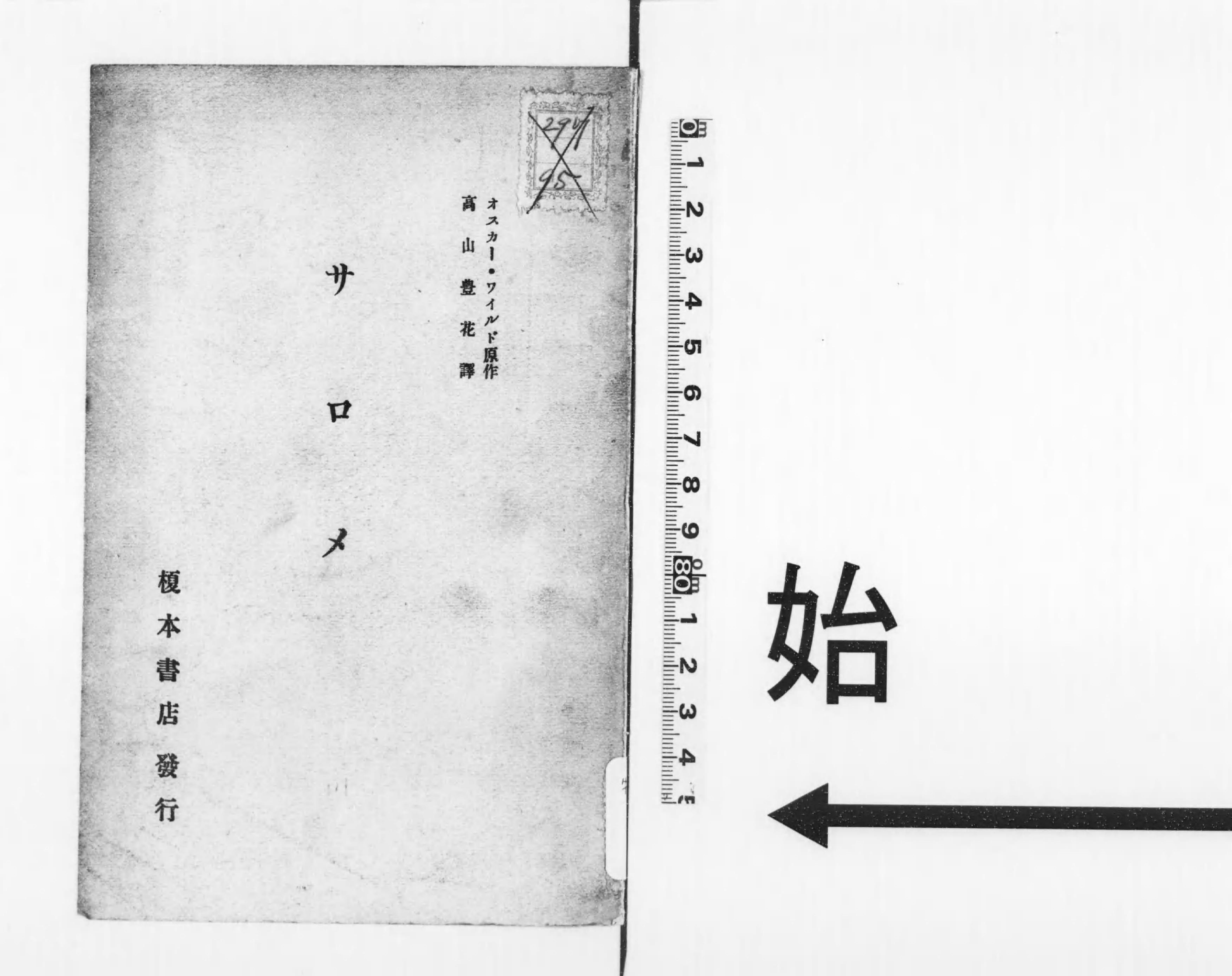

オスカー・ワイルド原作

高山豐花譯

サロメ

榎本書店發行

4手115
po

オスカー・ワイルド原作

高山豐花譯

血の舞踏

サロメ

大正
15. 1. 9
内交

血の舞踏『サロメ』

血の舞踏『サロメ』

1、「Salome : Drame en nw Acte」はワイルドの佛語原本より譯した。

2、「櫻の廢國」はチエホフの晩年の戯曲で尤も完成したものだ。

3、一は獨逸文藝の代表で、一は露西亞文學の精華だ、両者を集合したこと両文學比較に面白い味があるはずだ。

◇人　物◇

エロド・アンチパス……ジュデア分封の王
ヨカナーン……豫　言　者
守備兵大尉……若いシリー人
チ・ジュレン……若いローマ人
カッパトース人
兵　卒　1
兵　卒　2
エロヂアスの舍人
ナ　ー　マ　ン……黑人首斬役
エロヂアス……王　妃
サ　ロ　メ……エロヂアスの娘
サロメ附の女奴隷
ジュデ人、ナザルト人、其他

場　面

ジュデア分封王エロド宮殿前の廣大なるテラッセ。饗宴場の廣間に續く。兵士等欄干に寄りかゝり居る。左手に巨大なる階段。右手奥には青銅側の神秘なる古井戸。月明の夜。

守備大尉「サロメ女王の今夜の美しいこと」

エロヂアスの舍人(月を指し)「月を御覽なさい！　實に不思議に見えるではないか。宛ど墓穴から出て來た死んだ女子に似て居ます。何んとなく死人でも捜して居る樣に」

守備大尉「不思議な色だ。黄ろい被衣を被つて、銀の足を持つ小女王の樣だ。小さい白鳩を並べた足をした女王のやうだ。そして今舞踏でもして居ると云ふ風だ」

エロヂアスの舎人「月が死んだ女子のやうに見える。そしてゆるやかに流れて行く」
兵卒1（彼方を見乍）「何と云ふ騒をするのだ。吠えてる獣は何だ？」
兵卒2「彼はジュデ人だ。彼奴等は何時も極まつて彼様だ。多分宗教の議論を爲て居るのであらふ」
兵卒1「如何して宗教の議論を行るのだ？」
兵卒2「宜くは知らん。たゞ何時も彼様なのだ。――例へばパリサィが天使だと云ふ者がある時、イヤ、サドカイ派には天使など無いと爭論するんだ」
兵卒1「そんな事で血道を上げて論爭するのは愚だ！」
守備大尉「サロメ女王の今夜の美しさはどうだ」
エロヂアスの舎人「貴方は最前から女王の噂許りして居る、何時までも疑視て居ますね。あまり過ぎる様です！。人をその様に見詰めるものでない。今に變つた事が起らねば宜いが」
守備大尉「あの方はいつも美しいが、今夜は一段と美しい」

兵卒1「王様は今夜は陰氣なお顔をなすつてゐるではないか」
兵卒2「さうだ全く陰氣なお顔だ」
兵卒1「何かを御覧なすつてる」
兵卒2「さう誰かを御覧なすつてる」
兵卒1「誰を御覧なすつてるのだらふ」
兵卒2「分らない！」
守備大尉「女王は何んと云ふ蒼いお顔だらふ！　あんな蒼いお顔をして居なさることを私は見たことがない。さうだ。銀の鏡に映つた白薔薇の花の影のやうだ。
エロヂアスの舎人「あの方を左様疑視ては不可ません。餘りにあの方を見過ぎます」
兵卒1「オヤ、エロヂアス様が王様のお盃に酒をお酌ぎなされた」
カッパドース人「あの眞珠の飾りのある黒い冠を召されて、髪の毛に青い粉を振りかけてお出でなさるのが、王妃エロヂアス様かな」
兵卒1「さうです。あの方がエロヂアス様だ。王様のお后だ」

兵卒2『わが王樣は葡萄酒を好まれる。三色の葡萄酒を召し上がるのだ。その一つはサモトラケ島から來る。それはセザール(ローマ皇帝)の袍のやうに緋色だ』

カッパドース人『俺はセザールを見たことが無い』

兵卒2『も一種はキプール市から來る。それは黃金の樣に美しくそして黃色い色をしてゐる』

カッパドース人『俺は黃金は何より好きだ』

兵卒2『第三の葡萄酒はシシール製で、それは血の樣に眞紅だ』

ヌビー人『おれの國の神樣達は血が大好だ。年に二度、神樣に供へる犧牲には若い男の兒と女の兒とを供へる。五十人の男の兒と百人の女の兒を犧牲とする。されどお供物が十分でないらしいと見え、神樣は時々俺達に向つてむごい憤りを現はされる』

カッパドース人『おれの國では、もう神樣達がゐなくなつた。何んでもローマ人が皆追ひ出して仕舞つたのださうだ。深山の奥にまだ隱れて居られると云ふ者もあるが、俺にはどうも信じられない。俺は諸方をいろ〳〵と搜して見た。山の上で三晩も明かして、神樣達の名をよんで見たがとう〳〵出て來られなかつた。多分神樣達はもう死なれて仕舞つたのであらふ』

兵卒1『ジユデ人は目に見えない神樣を拜んで居るといふではないか』

カッパドース人『おれにはその樣な事は分らぬ』

兵卒1『兎に角、彼奴等は現實に觀得るものでなければ崇敬しないやうだ』

カッパドース人『そんなことは俺には馬鹿らしく思へる』

ヨカナーンの聲(井戸から)『私の后から一人――より強い者が來るであらふ。私はその人の靴の紐を解くにも足らぬものだ。その人が來る時、おゝ荒れたる地は歡呼の叫びをたつるであらふ。大地には純白の百合の花が咲き匂ふであらふ――盲者の目も日の光を視得る。聾者の耳には新に物の音をきくであらふ――赤兒は惡龍の巢庵に戴れ遊ぶであらふ。幼き兒は獅子の髯を引つ張つて歩むであらふ』

兵卒2『彼奴を沈默させい。彼奴は何時も馬鹿げたことを吐く』

兵卒1「いやそんな事は無い。彼は聖者だ。そして柔和だ。俺は毎日彼の所へ食べ物を運び行く。あの男はその度に丁寧な禮を云ふ」

カッバドース人(古井戸を指さし)「實に不思議なる牢獄だ！」

兵卒2「彼れは古井戸だ」

カッバドース人「古井戸かい。では隨分身体を痛めやう」

兵卒2「いや、以前にも、今の王樣のお兄樣で、お后エロヂアス樣の先の夫であつたお方は、あの中に十二年の長年月入つてお在でなされたが、死にはされなかつた——尤もおしまひには縊られなすつたが……」

カッバドース人「縊り殺された。誰がそんなことをしたのだ」

兵卒2(首切り役の黒人を指して)「あの男よ、彼のナーマンだ！」

カッバドース人「あの男はさうした事を怖くは思はぬか」

兵卒1「王樣があの男に指輪をお渡しになつのだから」

カッバドース人「指輪、何の指輪だ」

兵卒2「死の指輪だ。王樣の命令だから、あの男は怖くは思はなかつたのであらふ」

カッバドース人「何んにしても王樣を縊り殺ろすなぞは何んと云ふ恐ろしい仕業だらふ」

兵卒2「王樣だつて、人民だつて、首に變つたことは無い」

カッバドース人「俺にはその樣なことは恐ろしい」

守備大尉「おゝ女王樣が食卓をお離れなすつた。餘程お疲なされた御樣子だ。やゝ此方へ向はれるぞ、さうだ。我々の方へお出でになるらしい。まあ何んと云ふ蒼いお顏だらふ。こんな蒼ざめたお顏を今まで見たことがない」

エロヂアスの舍人「もうあの方を御覽なさらない樣に、お願です。見ないで……」

守備大尉「あの方は何に譬へやうか。さうだ、風に震へて居る水仙の花の樣だ。——銀の花のやうだ！」

サロメ出で來る。

サロメ「あゝ私厭だ。王樣はどうして、あの震へて居る目蓋の奥から、土龍の樣な目

で私を見つめて居るのでせう。どうして始終見るのかしら――私の母様の夫になつて居る人が、彼の様に私を見ると云ふ事は變だわ、私何んと云つていゝのだか困る――實はわかつてゐるけれども」

守備大尉（女王を迎へて）「美しい女王様！　貴女は御宴會をお外しになりましたのですか」

サロメ「此處には何んと云ふ宜い風が通るのでせう？　私、漸と息が出來るわ。それに彼處に居る人の厭らしい事。ジエルサレムから來たジユデ人は、宗教の儀式の事許を喧しくどなり合つて居るし、始終お酒を飲んで不躾に酒をこぼす野蠻人も居るし。スミルナから來たグレース人は目をくま取つたり、頬を彩取つたり、髪の毛を渦卷かせたりして居る。狡滑で、瑪瑙のやうな爪をして、鳶色の上着を著て居るエジプト人や、不骨な、亂暴な言葉使ひをするローマ人も居る。本當にあのローマ人共の惡らしいことと云つたらない。卑しい人間の癖に、さも大國の君主だと云ふらしい高慢顔をして居るのだもの。私もうあの様な所に居られないこ

とよ」

守備大尉（忝しく）「女王様。貴女お腰にお掛けになりませぬか」

エロデアスの舍人「又しても何故あの方に物を云ふ――なぜあの方を疑つと見詰める！

――どうか變はつた事が生じなければ宜いが」

サロメ（月を仰いで）「あゝ、宜い氣持！　こうして月を見て居ることは、それは小さい銀貨の様だ。この上も無い可愛らしい銀の花と云つても宜い。冷たくつて清らかなあの月――本當に彼は清い處女だよ。清い處女の美しい姿だ。さうよ、きつと處女よ、決して汚された事のない清いのだ、女神達のように、決して男に委せたことが無いのだ」

ヨカーナンの聲（井の底より）「おゝ主がお出なされた。人の子がお出でなされた。人首馬体のサレタウルは河の底に隱れた。牛人半魚のシレーン等は河を捨てて森の落葉の下に埋れてしまうた」

サロメ（兵卒に）「今の聲は誰だえ」

兵卒2「殿下！　あれは豫言者にございます」
カッパドース人「彼は一体誰だ？」
兵卒1「豫言者だ！」
カッパドース人「フム、何んと云ふ人だ」
兵卒1「ヨカナーン！」
カッパドース人「何處から來たのだ」
兵卒1「沙漠から來たと云うて居る。彼は其處で蝗と野蜂の蜜とのみで生きて居たさうな。來た時の樣子は甚だ異樣なものであつた。駱駝の毛の衣を身に着け、獸皮の帶を腰邊に締めて居た。それは如何にも野蠻らしかつた。后からゾロ〳〵と大勢の人間が隨いて來た。中にはその男の弟子だと云つて居たものもあつた」
カッパドース人「不思議な男！　でゝどんなことを云つて居た」
兵卒1「誰にも分らない。時々は膽のつぶれる樣なことを公言する。然し、何が何んだか分つたものではない」

カッパドース人「見ることは出來まいか」
兵卒1「駄目だ。わが王樣がお許しなさらない」
守備大尉「おゝ女王が顏を扇でかくされた。小い白いお手は、小鳩が鳥屋へ飛んで行くやうチラ〳〵する。いや白い蝶々に似て居る。白い蝶々の樣だ」
エロデアスの舍人「それが何の關係があらふ。なぜさう見詰めるのであらふ。そんなに見るものではありません――大變なことになると不可ません」
サロメ（考へて）「豫言者とな。王樣の怖がつて居るその人かえ」
兵卒2「その樣な事は一向に存じませぬが――彼は豫言者ヨカナーンと申します」
守備大尉「殿下。お手與を運ばせませうか。園はいゝ景色でございます」
サロメ「彼の人は母樣のお身の上について恐ろしい事を申すと云ふではないかえ」
兵卒2「お氣に掛けなさいますな。彼の男の申すことは、何の事やら分りは致しませぬ」
サロメ「左樣よ。あの男は母樣のお身の上に就いて、恐ろしい事を云ふのだよ」

奴隷出で來る。

奴隷(恭しく)「王樣の仰せにございます。女王樣は御宴會の席へお戻り遊ばすやうとの仰せ附けにございます」

サロメ(兵卒に)「私は戻るのは厭！」

守備大尉「殿下！　畏れ乍殿下がお戻りにならぬと、困つたことに成りは致しますまいかと思はれます」

サロメ「豫言者と云ふのは年老つた男かえ」

守備大尉「殿下、お戻りなすつた方が宜しうございます。私が御案内致すことをお許るし下さいませ」

サロメ「豫言者は――年老つた男かえ」

兵卒1「いや、極めて若き男にございます」

兵卒2「殿下、それはよくは判明致しません。なぜなれば彼の男がエリーだと申すものもございます故」

サロメ「エリーとは」

兵卒2「それはこの國にズット昔居りました豫言者でございます」

奴隷(頭を下げ女王に)「お伺ひ仕つります。王樣へは殿下の御返事を何んと申上げたら宜しうございまするか」

ヨカナーンの聲(井戸から)「これバレスチーヌの國よ、お前を打つた者の笞が折れたと云つて喜ぶことを止めろ。なぜならば、その蛇の種族からバジリク(傳說の惡蛇バヂリコス)が生じ、それから生れた子が、み空をかける鳥共を皆呑んで仕舞う」

サロメ(井戸に眼をやり)「まあ何んと云ふ不思議な聲！　――私あの人と話がしてみたい」

兵卒1「殿下、それは甚だ無都かしいことと思ひます。王樣は誰にもあの男と口を利くことをお許しになりません。大祭司ですら、口を利くことは叶ひません」

サロメ「私はあの人と話が交はしたい」

兵卒1「それは成りませぬ」

サロメ「私はどうしても話がしたい」

守備大尉「殿下。それより、御宴會の席へお戻りなさいませ」

サロメ(兵卒に)「豫言者を連れてお出で」

兵卒1「それはなりません」

サロメ(古井戸に近より中をのぞく)「まあ、眞闇な底だこと。この樣な暗い穴の中に居ると云ふ事はさぞ恐ろしい事であらふ。まるで墓穴のやうた——(兵士らに)お前達。私の云つたことが聽へぬかえ。早くあの人を此處へ連れてお出で、私はあの人に逢ひたいのだ」

兵卒2「お言葉に背いて恐れ入りますが、それ丈けはお許しを願ひます」

サロメ「お前達は私をいたづらに待たして置く氣かえ」

兵卒1「殿下! 私共の生命は貴方樣に捧げたものにございます。それは如何なる申附けにも隨うべき筈でありますが、この事丈けはどうも力に及ばぬことでございます」

サロメ(守備大尉若いシリー人を見て)「あゝ!」

エロヂアスの舍人「おゝ! 一体この先どんな風になるであらふ。きつと困つたことが生ずる」

サロメ(若いシリー人に近附き)「ナラボト、お前はそれを私の爲にして下さるだらふね。私の爲にきつとしておくれだらふね。私はいつもいつもお前に優しく爲てあげた。お前は私の爲たいと思うことを爲て下さるわね。私は不思議な豫言者と云ふ男が見たいのだよ。その人に附いては種々の噂をきいた。王樣からも度々聽いた。王樣はどうやらこの人を怖がつてお在でのやうだ、王樣はあの人がきつと怖いに違ひない。ナラボト、お前も怖いのだらふ」

守備大尉「いや、私は誰も怖がつてはをりませぬ、けれども、王樣の堅いお言ひ附けでございます。この井戸の蓋は誰も開けてはならないと……」

サロメ「ナラボト! お前は私の爲にしてお呉れだらふね。さうしてくれれば私昨日手與にのつて、あの神樣の像を賣る店の川を通りかゝる時、お前に小さい花を—

――小さい綠色の花を落してあげてよ』

守備大尉『たとへ、どの樣な仰せがあつても、これ丈けは致されません。これだけは出來ませぬ』

サロメ(微笑して)『ナラボト、お前は、私にしておくれだらふね、私にしてくれる筈だよ。さうすれば私は約束する。明日、私が輿に乘つて、神樣の像を買ふ人達の居る橋を通り過ぎる時、私は、お前をうす物のかつぎ越しに見てやります。その上、ナラボト！　ことによると、一寸位笑つて見せてあげてよ。私を御覽。ナラボト私を御覽。あゝお前は私がこんなに賴むのだもの、キット爲て呉れるわねねキット爲て呉れる筈だつたね……私、それを信じて居るんだもの』

守備大尉(第三の兵卒に合圖する)『豫言者を引き出せ。――サロメ女王が見たいと仰せられる』

サロメ(顏をおほひ)『あゝ！』

エロデアスの舍人『おゝ何んと云ふ變な樣子の月だらふ。自分でわが死体にかけた布を引張らふとする死んだ女子の手の樣だ！』

守備大尉『實に不思議な月だ。琥珀の目の樣な女王とでもいつて宜い。うすものゝ雲の影から小さな女王の如くほゝ笑んでゐる』

豫言者ヨカナーン。古井戸から出て來る。サロメその顏を見て後退さりする。

ヨカナーン『罪の盃になみ〳〵と毒酒を溢れさせたるものは何處に居る！　銀の上着を着て、万人の前で死ぬべき運命の男は何處に居る！　その男に此處へ來いと云へ沙漠の空に、宮殿の中に響いた聲音をきかせてやる』

サロメ(振返へり)『彼は果して誰のことを云つて居るのだらふ』

守備大尉『そは誰も存じませぬ』

ヨカナーン『壁上に美しい色で描かれた男の姿を、美しい色で描かれたカルデーの男の姿を見し女子はどこに居る！　そして描かれた姿に色慾を起し、カルデーの國に使者を送つた不粹なる女は何處に居る？』

サロメ(驚いて)『おゝあれは私の母樣の事を云つて居るのだ』

守備大尉『そんな筈はございません』
サロメ『いゝえ私の母様の事を云つて居るのに違ひない！』
ヨカナーン『腰に飾帶を締め、頭に彩色の冠を被つた彼のアッシリアの隊長に嘗てその身を委せた女子は何處に居る！ 細かい麻の着物にヒヤヒントの石を飾り、金色の兜、銀色の盾をもつて大なる体格を裝ひしエジプトの若者に嘗てその身を委せた女子は何處に居る。その女子に――淫亂の寢床から、血族相姦の臥床から、起きて來いと傳へよ。今主の爲に道を啓かん者の聲をきかせてやる。不倫なる女子はすぐと惡事を改めるが宜い。若し悔ひ改めずして、尙も罪惡に執着するならば、その女子をこゝへ引き來れ、主は御手づからそれに戒める鞭を加へん』
サロメ『まあ、恐ろしいことを云ふ。恐ろしいことを』
守備大尉『殿下。どうぞここにおいでなさいますな』
サロメ『おゝ恐ろしい眼光！ 恐ろしい瞳！ チール製の絨緞に炬火で黑い穴を燒き拔いたとでも云はうか、惡龍の棲む、惡龍のかくれすむエジプトの黑い洞穴とでも云はうか、おゝ何と云ふ恐ろしい眼！ 氣まぐれた目の光がチラ〳〵輝く黑氷湖とでも云はうか――あの人はまだ云うだらふか』
守備大尉『殿下。どうぞ此處をお去りを願ひます』
サロメ『それにあの人 痩せ方――それは象牙細工の人形の樣よ、銀の人形とでも云はうか――あの人は屹度冲天の月の樣に清淨な人に違ひない。あの象牙に似たあの人の肌はきつと冷かなことであらふ。――私もつとあの人の傍に寄つて見たくなつた』
守備大尉『殿下。それはなりませぬ』
サロメ『私はあの人の傍近く寄つて見ねば氣がすまぬ』（歩み寄る）
守備大尉『殿下。殿下』
ヨカナーン『私を疑視する女子は誰だ。私はその眼で見て貰ひたく無い。あの女子は何故金色にかゝやく眼で私を見詰める？ 私はあの女を知らぬ。又それを知らふとも望まない。おゝあの女子に早う去れと云へ。私の話を爲度いのはあの女子で

無い！」

サロメ「私はエロデアスの娘サロメじや。ジユデの女王じや」

ヨカナーン（両手で眼を塞ぎ）「下がれ！　おゝバビロンの娘！　主に選ばれし者に近寄るな。お前の母は地の上に不義の酒をこぼさせた。お前の母の罪惡は神のお耳にまで聞えて居る」

サロメ「ヨカナーン。お前の聲は私の心を醉はせます」

守備大尉「殿下。殿下。――殿下」

サロメ「まつと物を言つてお呉れ。もつと云つて。――ヨカナーン。私、どうすればいゝの、え言つて聞かせておくれ」

ヨカナーン（後退さり乍）「近寄るな！　遠ざかれ！　ソドムの娘。お前はお前の顔にかつぎして、頭に灰を撒き、沙漠に行つて人の子を求めよ」

サロメ「その人の子とは誰だえ。その人もお前の樣に清く美しいのかね」

ヨカナーン「下がれ。下がれ。私は今、この宮の中に死の天使の羽音が聽える」

守備大尉「殿下。何卒もう中へお入り下さいませ」

ヨカナーン「主なる神の天使。あなたはその劍をかざして何を爲されます？　この穢れたる宮の中で何を搜しておいでです。銀の上着を着けて死ぬ者の時はまだまぬりませぬか」

サロメ（懷しげに）「おゝヨカナーン」

ヨカナーン「私を呼ぶは誰だ」

サロメ「ヨカナーン！　私はお前の肉体を好いて居る。お前の肉体は鎌の芒のまだ觸はつたことの無い、野の百合の樣に白い。お前の肉体は山上の積雪のやうに、ジユデの山の上に積つて谷間を流れ行く雪の樣に白い。アラビヤの女王の國に咲く薔薇もお前の肉体ほど白くはあるまい。女王の國の薔薇でも、草の葉の上を踏む曙の素足でも、海の懷に休む月の白い胸でも、この世の中にありとある物、お前の肉体ほど白くは無い。お願する。私をその体に觸らしてお呉れ！」

ヨカナーン「下れ。バビロンの娘。女子の爲にこそ世の罪惡は蔓つてくる。物を言う

な。私はお前の婬聲をきゝ度く思はぬ。私の聞く御聲は、主の言葉許りだ」

サロメ「お前の肉体は厭らしい。癩病やみの体の様じや、いや蛇の這ひ廻る漆喰の壁の様だ。蝎の巣食ふ漆喰の壁の様だ。白く塗りつぶした墓穴の様——中にはきつと穢い物が一杯に埋めてあらふ？　おゝ氣味が悪い、お前の肉体は氣味が悪るい私の好きなのはお前の髪の毛だ。ヨカナーンお前の髪の毛は葡萄の房の様よ！エドムの葡萄棚に下がつてゐる黒葡萄の房の様じや。お前の髪の毛はリバノンの山の檜の様だ。獅子や、山賊が眞晝間來てかたる程の影を持つリバノンの山の檜の影の様だ。長い闇の夜でも、月光がかくれて、星が氣味悪るがる闇の夜でさへそれ程に黒くはあるまい。森の中に棲つて居る沈默でもそれ程黒くはあるまい。この世の中の黒い物はどの様なものでも、お前の髪の毛ほど黒いものがあらふか

——お願じや。お前の髪の毛に觸はらしておくれ！」

ヨカナーン（後退さり乍）「下がれ、無禮だ。ソドムの娘。觸れるな、主の神の殿堂を汚すことはならぬぞ」

サロメ「お前の髪の毛は氣味が悪い。塵埃にまみれてゐる。荊棘の冠とでも云はうか。頸のまはりに黒い蛇がとぐろ巻いてゐるとでも云はうか。私はお前の髪の毛は好まぬ——私の好きなのはお前の口だよ。ヨカナーン、お前の口は象牙の塔に結んだ緋の紐のやうだ。柘榴の實を象牙の小刀で斷ち割つた様だ。チールの園に結ぶと云ふ柘榴の實もそれ程に赤くは無い！　王様の出御の時、又、敵を恐怖させる喇叭の音もそれ程に赤くはない。お前の口は釀造桶に葡萄を踏む者の足よりも赤い。お寺の坊様たちに飼はれて居る鳩の脚より赤い。森の中で獅子を殺ろした獵師の足よりも赤い。お前の口は漁夫が海の底の薄明りで發見しも、王様の御料に献上する珊瑚の枝の様だ。お前の口は、モアブ人がモアブの洞穴から掘出して王様に賣る辰砂の様だ。それは辰砂の彩色した珊瑚細工したベルシャの王様の弓の様だ。この世の中にある赤いものと名づくるものも、お前の口程赤いものは無い

——お願だ。お前の唇に接吻させておくれ」（近づく）

ヨカナーン（顔を兩手でおさへ）「成らん！　バビロンの娘。ソドムの娘。成らん！」

サロメ「私はお前の口に接吻する！　ヨカナーン。私はお前の口に接吻してよ」

守備大尉「殿下。殿下。何事です。ミルラの花束の様な貴方が、鳩の様な貴方が、この男をお覽なされてはいけません。この男にお言葉をおかけ下さいますな。私はもうそれを伺つて居ることが出來ませぬ。――殿下。殿下。その様なことを仰しやらないで下さい」

サロメ「私はお前に接吻する。ヨカナーン！」

守備大尉「あゝ！」

大尉自殺。サロメとヨカナーンの間に倒れる。

エロデアスの舍人「おゝ若いシリー人が死んだ。若い大尉が死を遂げた。私の友であつた男は自ら死んだ。私はこの男に香箱と銀の耳輪とを贈つた。それが遂々死んでしまつた。私はあの男の身の上に何か變つた事が起らなければ宜いがと恐れて居た。そしてそれを私は豫言して置いた。それがとう〳〵起つた。今夜のあの月はどうも、人を捜して居るやうだつたが、その捜して居たのがこの人だとは知らなんだ。あゝ何故、私はこの人を月から隱して置かなかつただが――どこか洞穴の中にでも隱しておいたなら、月はこの人を見附けてとりさつては行かなかつたらふに」

兵卒1「殿下。若い大尉は自殺いたされました」

サロメ「お前の口に接吻させてお呉れ、ヨカナーン！」

ヨカナーン「エロデアスの娘。お前は怖いと思はぬか。今日、この宮の中に死の天使の羽音が聞えると言つたことを知らぬか、その天使は果して來たではないか。お前は神を恐れぬか」

サロメ「お前の口に接吻させておくれ！」

ヨカナーン「おゝ邪淫の生みたる娘！　お前を助くる人はこの世に一人しか無い。それは先程云つた方だ。お前はその人を訪ねよ、その人は今ガリレーの海上、小舟に乘つて居て、お弟子達に說敎をして居られる。お前はその海のほとりへ行つて跪いてその方のお名を呼べ。その方がお出になつたなら、その方の御足の下にひ

れ伏して、これまでの罪業をゆるしてお貰ひ申すがいゝ」

サロメ「お前の口に接吻させておくれ」

ヨカナーン「不義に穢れた母の生んだ娘、あゝ呪はれて居れ、おゝ呪はれて居れ」

サロメ(近く進み)「お前の口に接吻したい！」

ヨカナーン「お前の顔を見るのは厭だ。お前の顔はみたくない。えゝ呪はれて居れ。サロメ、呪はれて居れ！」

井戸の中へ降り行く。

サロメ「私はお前の口に接吻する」

兵卒1「死骸を他へ片附けねばならぬ。王様は御自分でお手を下した以外の死骸を見ることがお嫌いだ」

エロヂアスの舍人「その人は私の兄弟だつた。いや兄弟よりも親しかつた。いつぞや私は彼に瑪瑙の指輪をやつたが、この人はそれを指にはめて居た。夕方になると私達は川の縁や、杏の林の中を散歩した。さうしてこの人は自分の國の話をしてきかせた。いつも低い聲で話をして、それは笛を吹く音に似て居た。この人は又常に川の水にうつる自分の影をのぞくのが大好きであつた。私　そんなことをするのでないといつてやつた」

兵卒2「お前のいふ通りだ。早く死體をかくさねばならぬ、王様のお目觸りになる」

兵卒1「大丈夫だ、王様はテラッセまでお出ましになつたことは無いが、それは豫言者を氣味惡るがつてお出で故」

エロド王、及王妃エロヂアス、廷臣等出で來る。

エロド王「サロメはどうした。女王はどうした。宴席へ戻つて來いと言ひ附けたのを何故戻つて來なかつた。おゝお前は此處に居たか」

王妃エロヂアス「彼女を御覽になつてはいけません。貴方はいつも彼の顏許り見ていらつしやる」

エロド王「月か變に見ゆるぞ。どうも餘程變に見ゆる。苛々した女子が、所構はず相手の男を捜して居る樣に見ゆる。女子はまるで裸体である。雲がそれに着物をき

せやうとしても着せさせないのだ。女子は酒に醉ひしれたものゝ様に雲の中をよろけ歩るいてゐる。――あれは屹度男を捜して居るに相違ない。そうだ酒に醉つた女子のやうによろけて居る。あれはヒステリーの女の様見える」

王妃エロヂアス『月はやはり月でございます。もう參りませう。王にはその様な所は何も用はない筈です」

エロド王『いや、私は此處に居る。(廷臣をふり返り)そこに敷物をしけ。炬火をつけよ。象牙の卓を出せ。碧玉の腰掛を運べ。こゝの空氣は至つて心持がよい。私は客人たちともつと飲まう。セザールの使者に接待せねばならぬ」

王妃エロヂアス『いゝえ。貴所がここにお在でなさるのはそのためではございますまい。私はそれを存じて居ります」

エロド王『いや、此處の空氣は心持がよい。さあエロヂアス、客人の所へ行かう。(辷る)や、辷つた。血に辷つた。あゝ惡しき前兆だ。非常に惡い前兆だ。一体、どうして此處に血があるのだ。それに――この死骸はどうしたと云ふのだ。宴會の

度毎に客人に死骸を見せぬことは無いといふ、エジプト王の様に俺を考へて居るのか全体これは何だ。私はこのやうなものを見度ない」

兵卒1『大尉殿でございます。陛下。三日前、大尉を申し附けになりました若いシリー人でございます」

エロド王『私はこの男を殺ろせと云つた覺がないぞ」

兵卒2『陛下。自殺をしたのでございます」

エロド王『何故だ。私はこの男を大尉に任じたのに」

兵卒2『私にも分かり兼ねます。然し大尉は自分の手で死なれました」

エロド王『不思議なることだ。自殺するのはローマの哲學者以外に無いと私は思つて居た。こりやチジュレン、ローマの哲學者は自殺をするさうだな」

チジュレン『陛下、自殺するものも御座います、それはストイック派のものであつて極く下等の輩でございます。詰りそれ等はごく馬鹿げた輩なのでございます」

エロド王『私も全感だ。自殺するなぞと云ふのは馬鹿氣て居る」

チジュレン『ローマでも彼等の愚を嗤はぬものはございませぬ。セザールも彼を嘲る詩をお作りなされました。その詩は方々で唱へられます』

エロド王『ホウ、彼等を嘲る詩を作られたか。實にセザールには驚く、彼は何んでも出來ぬことはない――然しこの若きシリー人が自殺をしたのは不思議だ。實に惜しいことをした。左樣だ、全く惜しいことをした。何しろ彼は風采の優れた男であつた。いかにも男らしい態度であつた。いかにも優しい眼を持つて居た。そしてその優しい眼によつてあの男はサロメを見て居た樣に思う、とにかく彼は少し見過してゐたやうだ』

王妃エロヂアス『あれを見過ぎてゐるものは他にも一人御座います』

エロド王『彼の男の父は國王であつた。彼れを私は王國から追ひ出したのだ。そしてその妃であつた女を、お前は奴隷にした筈だ。こう云ふ理由で私はこの男を客分として置いた。又この男を大尉に昇進せしめたのもさう云ふ譯があつたのだ、それが自殺したとあつては甚だ氣の毒だ。それはとも角も、お前方はなぜ死骸をこの儘にして置くのだ、私はそれを見るのを好まぬ。急ぎ取片づけろ』

人々大尉の死骸を運ぶ。

エロド王『ここは寒い風が吹くやうだな』

王妃エロヂアス『いゝえ、風は吹いて居りませぬ』

エロド王『いや確に風が吹いて居る。それに空の上に翔ける鳥の羽音が聞える、餘程大きな翼を振る音だ。お前達の耳にはそれが響かぬか』

王妃エロヂアス『何の音も聽へませぬ』

エロド王『聽へぬ？　オヤ私にももう聽えなくなつた。いやさつきは確に聽へた。確に風の音だつた。それが止んだのだ。――いや待てよ、又聽える、おゝ聽える、そして確に翼をたゝく音だ！』

王妃エロヂアス『いゝえ。私の耳には何の音もいたしませぬ。貴所はどうかなすつたのでせう。さ、這入りませう』

エロド王『私はどうとも爲て居らぬ。どうかして居るのはお前の娘だ、お前の娘は餘

程身体が悪いと見える。彼が彼の様な蒼い顔をして居るのは初めてだ」

王妃エロヂアス「彼の顔を御覽になつては成りませぬと申しますのに」

エロド王「酒をついでくれ(侍臣酒をつぐ)サロメここへお出で、そして私と一緒に酒を飲れ。此處によき酒がある。セザールがわざ〳〵送つてくれたのだ。おゝお前のその小さい赤い唇をこれで濕してくれ。その后を俺が飲み干す」

サロメ「陛下！　私は少しも乾いては居りませぬ」

エロド王「お前の娘の返事をきいたか」

王妃エロヂアス「あれの申す通りだと存じます。どうして貴方は繁々とあれの顔許りを御覽なさいます」

エロド王「果物を持つて來い。(侍臣果物を進む)サロメ。私と一緒にこの果物を食べよう。私はお前の小さい齒で、この果物につけた齒形を見ることを好む。この果物のほんの角でも嚙んでくれ。私は喜んでその后を食べる」

サロメ「陛下！　私はひもじくは御座いませぬ」

エロド王(王妃に向ひ)「お前の娘はよく躾けであるな」

王妃エロヂアス「娘も私も王族の種に生れました。それが貴方はお祖父様の代に駱駝の番人でした。その上盗人でございました」

エロド王「その樣なことは嘘だ！」

王妃エロヂアス「本當だと云ふ事は貴方のお心が存じて居る筈です」

エロド王「サロメ、私の傍へ來て坐れ。お前の母の王座を貸してやる」

サロメ「陛下！　私は別に疲れては居りませぬ」

王妃エロヂアス「あの通り、娘は貴方の御心の中を知つて居ります」

エロド王「おゝ、私は何を云ひ附ける積りであつたか。分らなくなつた。さうさう漸思ひ出した……」

ヨカナーンの聲(井戸の中より)「見よ。その時は來た。豫言をしたその時は來た。私が云つて居たその日が來た」

王妃エロヂアス「あれを默らせて下さい。私はあの聲をきくことを好みませぬ。あの

男はいつも私に惡口ばかり吐きかける』

エロド王『お前の惡口を言はしない。それに、あれはなか〳〵ねらい大豫言者だよ』

王妃エロヂアス『私は豫言なぞを信じません。人間の未來が分るものではございませんん。それに彼は私を惡るくばかり申します。貴方はあの男を恐ろしがつていらつしやるのでせっ――私はあなたが彼を怖がつて居ることを信じて居ります』

エロド王『私は別にあの男を怖いとは思はぬ。私は誰も怖くは思はぬ』

王妃エロヂアス『何んと申されても、貴方があの男を怖がつて居ることは事實でございます。若しこはがつてお在でなさらぬならば、ジユデ人が半年も前から、あの男を渡してくれと騒いで居りますのを、何故、お渡しになりませぬ』

ジユデ人1『それで御座います。陛下。願はくは彼を我々の手にお渡し下さいませ』

エロド王『申すな。お前達には私は彼はもはや返答をして置た。私は彼の男を渡したくない。彼は神の如き人間だ』

ジユデ人2『決してその様なことはございませぬ。豫言者エリー出現以來この世には

神の如きものはございませぬ。あれが神を見た最后の人でございました　今の世には神は姿をお現はしにはなりませぬ。深くこの世からおかくれになられて居りまする、故に、國々には大きな禍が出現するのでございます』

ジユデ人2『それに眞實神様を見たと云ふエリーも果して左樣であつたか分らぬことでございます。ことによれば彼の見たと申すのは神の影かも分りませぬ』

ジユデ人3『いや神が隱れて居られると云ふ事は決して有りうべきことではないやうに存じます。神は何時にても、何處へでも姿を現される。神は善い者の中にも、惡い者の中にもお在でなさる』

ジユデ人4『その樣な危狂なことを云ふものでない。それは非常に危險な考へだ。グレースの哲學の行はるゝ、アレクサンドリー派の爲すべき考へだ。グレース人は教徒ではない。彼等は洗禮すら受けて居らぬ』

ジユデ人5『神樣が、どう云ふことをなさるか、それは吾々人間共には分らぬ。神の道は深秘だ。恐らくは我々が目睹して惡と呼ぶことが善であつて、我々が善と呼

ぶところの事が反つて惡であるかも知れない。人間にはこうしたことは分らぬ、人はたゞ神に身を委ねればよいのだ。神は限りなく強い力を持たれる。神は弱い者も、強い者も同じやうに取挫しがれる、神は強弱の間に何の頓着もない」

ジユデ人1『それは眞實だ。神は恐ろしい。神の前には強いものも弱いものも無い。臼の中で小麥を搗くやうに一緒に搗き交せておしまひなされる。そのくせ人間は神を見ることが無い。豫言者エリー以來誰でも神を見ない』

王妃エロヂアス『あれを默らせて下さい』

エロド王『然しヨカナーンがお前達の云ふエリーだと云ふではないか』

ジユデ人1『そう云ふ筈はございません。豫言者エリーは三百年以前の人でありました』

エロド王『然しあれが豫言者エリーだと云ふ者がある』

ナザルト人1『確に彼は豫言者エリーに違ひありません！』

ジユデ人1　あれは豫言者エリーではありません！』

ヨカナーンの聲（井戸の中より）『おゝその日は來た。主の日は來た。山の上に――世界の救濟者たるべき人の足音が聞ゆる』

エロド王『あれは何う云ふ意味だ。世界の救濟者とは果して誰をさす』

チジユレン『多分、セザールのお使ひになる稱號でございます』

エロド王『いや、私は昨日も羅馬から書狀を受けた。それによるとその樣なことは無い。セザールはジユデへは來られぬ筈じや、チジユレンおまへは冬の中ローマに行つて居たが、そうした噂をきいたことがあつたか』

チジユレン『陛下。その樣な噂はございませんなんだ。私はたゞ稱號のことを申したのです。それが種々を持つセザールの稱號の一つだと申しました丈でございます』

エロド王『さうじや、セザールは來られない。この國へは來られない。噂によれば痛風に惱んでゐられるさうだ。象の足のやうになつて居られるさうだ。それに政治上の利害もある。ローマを去るものはローマを失ふ。セザールのこの地へ來らるゝ筈がない』

ナザルト人1「豫言者の申したことはセザールの事ではございません」
エロド王「セザールでは無いのか」
ナザルト人1「左樣でございます」
エロド王「それでは誰のことを言うのだ」
ナザルト人1「既に出現した救世主メシーの事でございます」
ジュデ人1「メシーは出現せぬ」
ナザルト人1「イヤ出現した。そしてその人は既に到る所で奇蹟を行ひつゝあつた」
王妃エロデアス「奇蹟――私はいまだ奇蹟なぞは信じない。それはこれ迄も度々見た馬鹿らしくそして噂程でも無い。(舍人に向ひ)私の扇を持つといで」
ナザルト人1「いや、その人は現實に奇蹟を行ひました。さうさう斯う云うことがございました。――私共のガリレーのとある小さい町に於て婚禮がありました時、小さい町と申しましてもナカ〳〵勢力のある町にございまするが、その方は水を酒にかへて飲ませました。それはその場に居合せた人の談話でございます。又カファルナウム外に見るも痛ましき癲病やみが居りましたが、その方は一寸手を離れた丈でそれを癒してしまひました」
ナザルト人2「いやカファルナウムであの方が癒されたのは二人の盲目であつたよ」
ナザルト人1「いや、確に癲病やみであつた。尤も盲人の目を見えるやうになされたこともあつた。――それからある時はその方がある山上で天使と談話されたことを見た者もある」
サドカイ人「天使などは無い」
パリザイ人「いや、天使はなければならぬ。然しその男が天使と話を行つたと云ふことは甚だ信じられぬ」
ナザルト人1「その方が天使と話された事は、當時大勢通りすがりに見た者があつたのだ」
サドカイ人「天使と話するなどと云ふことは有り得べき事でない」
王妃エロデアス「この人達は、つまらぬことでどこまでイガミ合うのだらふ。おゝ獣

よ！　餘りに騒々し過きる。（舍人に向ひ）これ〳〵扇を持つてお出で（舍人、扇を渡す。王妃扇を受取る）お前の樣子は夢でも見て居る人の樣だね。夢などは見るものでない。夢を見ると云ふのはそれは病氣だよ」（扇で舍人を打つ）

ナザルト人2「それから又ジャイルの娘の奇蹟もございました」

ナザルト人1「おうさう〳〵、あれこそ確なことだ。誰とてあれを嘘とは云はない筈だ」

王妃エロヂアス「本當にこの人達は氣が違つてゐるさうな。この人を默らせて下さい

默らせて――」

エロド王「そのジャイルの娘の奇蹟と云ふのは一体どう云ふことだ」

ナザルト人1「ジャイルの娘が死んだのでございます。それをその人が甦らせました

これを奇蹟と云はないでどこに奇蹟がありませう」

エロド王「その男は死人を甦らせたのか？」

ナザルト人「左樣でございます。死人を甦らせます」

エロド王「私はその樣なことをさせたくは無い。私は死人を甦らせるなどといふことを許すことはならん。それならば其の男を探し出し、以來死人を甦らせることはならぬと言うてやらねばならぬ。その男は今どこに居る」

ナザルト人2「陛下！　その人は處定めず歩るいて居りますので、見附けやうとしてもそれは難儀でございませう」

ナザルト人1「唯今サマリーに居られるといふことでございます」

ジュデ人1「おゝその男がサマリーに居ると云ふこと丈けでも、それがメシーでないといふことがわかる、もしメシーならばサマリー人の中には出現されぬ筈だ。サマリー人は呪はれた者共だ、彼等は決してお寺に供物をあげたことがない」

ナザルト人2「あの人がサマリーを立たれたのはもう數日前だ。今頃は多分ジュルサレムの近所に居られることであらふ」

ナザルト人1「いや〳〵其處にも居られない。私はジェルサレムから來たのだ、それがもう二月も前から、誰もあの人の樣子をきいた者がなかつた」

エロド王「爭ひを止めよ。兎に角どちらでも宜い。然しその男は必らず見附出して、死んだものを活かすことなぞをしてはならぬと云ふ私の命令を傳へねばならぬ。水を酒に變へたり、癩病や盲目の病を癒す――そんなことは爲度ければするが好い、私はそれについて別に故障を云はぬ、とにかく癩病やみを治すといふことは良いことだと思ふ。が、死人を甦らすなぞとは以ての外のことだ――死んだものが再び出て來るなぞと云ふのは極めて恐ろしい事だ」

ヨカナーンの聲(井中より)「おゝ姪婦！　おゝ賣女！　金の瞳と、金の目蓋なるバビロンの娘！　主の神のお言葉を聞け！　汝の周圍には汝を惡む大勢の人が圍繞するであらふ。そして人々は汝に向つて小石を投附くるであらふ！」

王妃エロヂアス「あれを默らせて――」

ヨカナーンの聲(井中より)「兵ども(つはもの)がお前を劍の先に貫くであらふ！　楯の下に押し潰さねば置かぬであらふ！」

王妃エロヂアス「本當に外聞の惡いことを云ふ」

ヨカナーンの聲(井中より)「かくして地上に於て仝じ罪の跡を絶たう。總ての世の女子が同じ惡行を眞似るであらふ！」

王妃エロヂアス「陛下！　あの男が私に向つて行ふ惡口が貴方のお耳には入りませぬか。貴方は御自分が今恥しめられて居るのを打捨ててお置きになるのですか？」

エロド王「何もあの男はお前の名を指して言ひはせぬ」

王妃エロヂアス「名を指さぬが、あの男が恥ぢしめようと巧んでゐる相手が、私だと云ふことは貴所には分つてゐるでせう。私は貴方の妻ではございませぬか」

エロド王「さうだ。エロヂアス！　お前は私の大切なる妻だ。そして初めは私の兄弟の妻であつた」

王妃エロヂアス「その兄弟の手から、私をお奪ひなされたのは貴方でした」

エロド王「要するに私は兄よりも强かつた。――然しその樣なことは今改めて言うまい。そんな話はしたくない。今の話は豫言者の言つた恐ろしい言葉のことであつたな。考へて見るに、それは何か變つたことのあるべき前兆かも知れぬ。その話

は今私は爲たくはない、然しエロヂアス。客人のことを忘れてはならぬ。さあ、酒を注いでくれ。銀の大盃に……玻璃の大盃に……。私はセザールの健康を祝するために祝盃をあげる。ローマの方々が居られる席だ。セザールの健康のために祝盃をあげぬと云ふことはない」

一同「セザール！　おゝセザール！」

エロド王「お前の娘サロメは如何にも蒼い顔をしてゐるではないか」

王妃エロヂアス「娘が蒼い顔を爲てゐやうと、わまいと、貴方には別に關係の無いことでございます」

エロド王「私はサロメがあの樣な蒼い顔を見たことがない」

王妃エロヂアス「あれを御覽させるには及びませぬ」

ヨカナーンの聲(井の中より)「見よ。その日は黑布の如く黑み、月は血の如く赤ど、大空の星辰は、熱せざる無花果の枝から落つる如く落ち、世界の王者共は怖れ戰くであらふ！」

王妃エロヂアス「私はそんな風の日が見たいこと、月が血の樣になつたり、星が熱る無花果の樣に地上に落ちたりする、不思議な日が見たい。この豫言者はまるで酔どれの樣に囈言を言ふ。然し私はあの男の聲をきくことがもう我慢出來ない。私はあの聲が憎い、あれに沈默する樣に言附けて下さい」

エロド王「イヤ、さうでない、私にはあの男の云ふことが分らぬが、これも何かの前兆であるかも知れぬ」

王妃エロヂアス「私は前兆などと云ふことを思ひませぬ。あの男の云ふことは確に酔どれの囈言です」

エロド王「酔どれ？　それにしても彼れは神の酒に酔つて居るのかも知れない」

王妃エロヂアス「マア神の酒、それはどんな酒でございませう。どんな葡萄から釀すのでせう。そしてどんな釀造桶に盛られて居るのでせう？」

エロド王(サロメから目を離たず見乍)「チジユレン、お前ローマを立つ時、セザールが話されたと云ふ事は……」

チジュレン『陛下。……それはどの様なことでございますか』
エロド王「どんなこと。しや私はお前に質問したのでは無かつたが、おゝ私は何をかうとしたか忘れてしまうた」（又サロメを見る）
王妃エロヂアス「貴方はまだ娘を眺めておいでですね。彼を眺めることは成りませぬ
それは前程より申しました』
エロド王「お前はその事許り言つてゐる」
王妃エロヂアス「私は何度でも申します」
エロド王「おゝそれ／＼あの寺の再建と云ふことについて、種々やかましく言つてゐたな。一体それはどうなつたのか。たしか聖殿の帷が紛失したとかいふ話であつたな」
王妃エロヂアス「それをお除りになつたのは貴方でした。貴方は口から出まかせを言つてお在でなさいます。あゝ私はここに居り度うございません。奥へ參ります」
エロド王『サロメ。私のために舞踏をして見せてくれ』
王妃エロヂアス『私は彼に舞踏をさせ度うはありませぬ』
サロメ「陛下。私は舞踏は厭でございます」
エロド王『エロヂアスの娘サロメ、舞踏せい！』
王妃エロヂアス「彼に構はずお置き下さいまし」
エロド王『サロメ。舞踏せい。私の申附けだ』
サロメ「陛下。私は舞踏致しませぬ」
王妃エロヂアス（苦笑して）「御覽遊ばせ。あれは御申附けによく隨ひますこと」
エロド王「彼が舞踏をしてもせいでも、私は構はん。それは何んでも無いことだ。私は今夜は極めて氣持がよい。これ程いゝ心持はついぞ覺えぬことだ」
兵卒1「王様のお顔は極めて陰氣に見ゐるではないか」
兵卒2「さうだ、陰氣なお顔だ」
エロド王『私が宜い心持だと云ふのには理由がある。それは世界の主であり又萬王の主である。セザールは厭迄俺を寵愛される。それで遙々高價な贈物を遣はされた

その上私が敵であるカッパドースの王をローマに召喚することを約束された。恐らく彼はローマへ行けば磔刑に處せられたかも知れぬ。セザールは思ふ事、何事でも遂げられる。彼は確に世界の王だ。さう云ふ譯で私は愉快を催す權利があるのだ。この世の中に私の歡喜を害ふものは今一つも無い筈だ實に愉快だ」

ヨカナーンの聲(井の中より)「彼は王座の上にて猩々緋の袍をて着居るであらふ。その手には冒瀆の汚れを注いだ、金の盃を持つであらふ。主なる神の天使は彼に筈を加ふるであらう。その死骸を蛆蟲が食うであらふ」

王妃エロヂャス「陛下、おきゝなさいましたか、かの男は無禮にもあなたの事をあの樣に申してをります。貴方が蛆蟲に食はれるなぞと不群の言葉を吐きました」

エロド王「彼の言ふのは私の事でない。あの男は決して私に逆う言葉を出さぬ。彼の言ふことは多分カッパドースの王の事だ。彼の敵カッパドース王の事だ。カッパース王が蛆蟲に食はれるとふ豫言だ。あれは決して私の事でない。あの豫言者は私が兄弟の妻を奪つてそれを王妃にした。それが惡いと云ふ以外、何んにも私に楯をついたことがなかつた。それは或は道理かも知れぬ。とにかくお前は石女だから」

王妃エロヂアス「私が石女ですと、よくその樣なことが仰しやられます。御自分のお樂しみの爲に彼女に舞踏をさせたがつていらつしやるあなたが、そんなことをよく仰言られます。私は一人子供を產みました。貴方に子供が無いのでございますあれ程女奴隷の中からさへ出來ないのでございます、子の出來ないのはあなたで私しではございません」

エロド王「默んなさい。お前は石女だから、お前が子供を產まなかつたのだ。それで豫言者も我々の結婚を正しい結婚でないと言うのではないか。それは人倫に外れた結婚であつた。不幸を招く結婚だと言ふのだ——さう云ふのも尤ものやうな氣がする。いや確に道理があると思ふ、しかし、今はその樣なことも言うて居る時でない。現在の瞬間。私は幸福でありたい。實際に幸福なのだ、この上なく幸福なのだ。今何一つ缺けたことはないのだ」

王妃エロヂャアス『今夜あなたがそれ程の御機嫌でおいでたことは何より嬉れしく思はなければなりませぬ。ついに無いことですもの、でもう遲うございます。明朝狩場にお出でのことをお忘れにならぬよう、そしてセザールの御使者達に精々おもてなしをせねばなりませぬ』

兵卒1『いかにも王様のお顔は陰氣だ』

兵卒2『いかにも陰氣のお顔だ！』

エロド王『サロメ、サロメ。私のために舞踏をして見せてくれ。私が頼むから舞踏をして見せてくれ。私は今夜氣が塞ひでならん、もう氣が鬱くべきことがあつた。わしがそこへ出て來た時、私はいきなり血に辷つた。これは甚だよくない前兆だ。それから私の耳に空中の羽音が聽えた。恐ろしい大きな羽音か聞えた。私はそれか何の意味だか分らぬ。――あゝ私は今夜氣がふさいでならん。それ故私に舞踏をして見せてくれ。もしお前が舞踏すると云ふならば、お前は好きなものをねだるがよい、何なりとねだるがよい、私は必ずかなへてやる。サロメ私に舞踏をして見せてくれ。お前の好むものは何にても與へる――それは私の王國の半でも』

サロメ（立上つて）『陛下。私の望む者はどの樣なものでも下さいますか』

王妃エロヂアス『娘。舞踏をおしでないよ』

エロド王『おゝ何にても與ふる、王國の半でも與へる』

サロメ『陛下。お誓をなされますか』

エロド王『私は誓うぞ』

王妃エロヂアス『娘舞踏をするでない』

サロメ『王樣、貴方は何にかけてもお誓ひになりますか』

エロド王『命にかけて、この王冠にかけて、神々にかけても誓ふ。何でも好める物を望め、私はきつとお前に與ふる。よし王國の半分でも、私に舞踏をして見せてくれたならば直ちに與ふ。サロメ。私に舞踏をして見せてくれ』

サメロ『王樣！　なたお誓ひなさいましたな』

エロド王『誓うた』

サロメ「私がおねだり申すものはどんな物でも、それはあなたの王國の半でも」

王妃エロヂアス「娘。舞踏をするのではない」

エロド王「私の領土の半分でもやる。サロメ、お前が若し私の王國の中ばをねだつたとして國王になつて見よ。それはどんなに美しいであらふ。國女になつたお前の姿はきつと美しいことであらふ。――あゝここは寒い。なか〳〵寒い風が吹く。それにあの音は――どうしても私には空中の羽音が聞ゐるのかしら。鳥が、大きな鳥が、このテラッセの上を翔まはるとでも言うか。然し、どうしてその鳥が私には見えぬか、それにその羽音は氣味が惡い。その翼をふく風は極めて氣味が惡い、――おゝ凍えるやうな風だ。はてな。凍ゐる所ではない、どうも熱いぞ。恐ろしく熱苦るしい。息が止まるさうだ。恐ろしく熱苦るしい。おゝ息が止まりさうだ。手に水をかけてくれ。雪を口に入れてくれ。誰かこの袍を脱がしてくれ。早く、早く、いや〳〵打つちやつておいてくれ。おゝ苦るしいのは冠だ。薔薇の冠だ。宛で薔薇の花が火になつたやうだ。額に燒き附くやうな。おゝ堪らぬ。

（頭の花冠を引き捨て机上に投げ出す）おゝやうやく息が出來る。この花辨の赤さはどうだ。卓掛けの上に血を置いた様だ。然し目に見る物統てに一々意味を求むることは要らぬ。それでは生きて行くことが出來なくなる。いつそ、血の點斑も薔薇の花辨同樣美しく思うがいゝ、何んでも左樣いふ風に解釋する方がいゝ――然しこの話はもう止やう、今では私は幸福だ。幸福である權利が私に無いだらふか、お前の娘が舞踏をして見せてくれると云ふことだ。サロメ、お前は私のために舞踏をしてくれると約束した」

王妃エロヂアス「私はあれに舞踏をさせたくはありません」

サロメ「私は、あなたの爲に舞踏を致します」

エロド王「お前は姫の云ふことをきくがいゝ。彼は私の爲に舞踏をしてくれると云ふ

サロメお前私の爲に舞踏をして見せてくれ。お前が舞踏した后、何なりとお前の欲しいものを望むことを忘れぬが宜い。お前の欲しいものは私は何んでも與へるそれは私の王國の半でも、きつとお前に與へる。それを私は誓うた」

サロメ「お誓ひなさいましたのですか」

エロド王「おゝ私は決して今迄口外した言葉を飜へした事はない。わしは自分の言ひ出した言葉を破らぬ。私は嘗て嘘を吐かなかつた。私は私の言葉の奴隷だ。私の言葉は君主の言葉だ。カッパドース王は嘘を平氣で云つてゐた、あれは城の王では無い。彼は臆病者だ。人非人だ。彼は當然拂ふべき金を拂はぬ。しかも却つて此方の使者に侮辱を加へた。彼れの言葉は人を傷つける言葉だ。然しセザールは彼をローマに呼ん：磔刑に處すであらふ。もし、そうでなくば、彼は蛆蟲に食はれて死ぬ。それは豫言者がさう豫言した。さあサロメ。早く始めて呉れ。何を待つてゐる」

サロメ「私は奴隷達が香油と七本の面紗（ベール）とを持つて來て、靴を脱がせてくれるのを待つて居るのでございます」

奴隷香油と七本の面紗とを持ち來る。サロメの靴を脱がせる。

エロド王「おゝお前は素足で舞踏を致すか、一段と宜い。お前の小さい足は白い鳩のやうであらふ！　木の上で舞踏をして居る小さな白い花のやうであらふ。あゝ不可ない！　血の上でお前は舞うつもりか、そこの地上には血が流れてゐる。女王に血の上で舞踏をさせたくない。それはこの上も無い惡い前兆かも知れぬ」

王妃エロヂアス「彼が血の上で舞踏しました所が構はぬではありませんか。貴所こそ最前その上を歩まれたではありませぬか」

エロド王「よし。私は構うまい。おゝあの月を見い。血のやうに赤う變つた。全く豫言者の言うた通りだ。それはお前達も聞いたであらふ。おゝ月が赤變した。血の樣に變じた。あれがお前達には見えないか」

王妃エロヂアス「えゝ、にゝ、私にはよく見にます。そして星が青い無花果のやうに落ちます。――それから日が黑布のやうに黑く變つて、世界の王者が震へおのゝきます。成程彼の申した通りです。これ丈けは豫言が當りました。確に世の王者は怖れおのゝいて居る。……兎角中へお入りなさいませ。貴方は御病氣でございました。ローマの方々が國へお歸りなされて、貴方は氣が狂うて居ると申しませ

う。さあ中へ這入りませう」

ヨカナーンの聲「エドムから來る者は誰だ。深紅に染めた衣を來てボスラから來る者は誰だ。その人の着物は美しく輝き、且偉大な姿をして歩み來る。何故あの人の着物は深紅に染まつて居るか」

王妃エロヂアス「さあ内へ入りませう。私はあの男の聲を聞くと氣が違ひさうです。あの男があの様に叫んでゐる時、娘に舞踏をさせたいとは思ひませぬ。あなたが眼も放たず見つめて居る中で、娘に舞踏をさせたくはありません」(立ちかゝる)

エロド王「いや妃。そこを立つてはならぬ。何を云うても無駄だ。私は彼が舞踏をして見せぬ内は中へ這入らぬ。サロメ私のために舞踏をして見せてくれ」

王妃エロヂアス「娘、舞踏をしてはなりませぬ」

サロメ「陛下。御免遊ばせ！」(サロメ立ち上る)

七つの面紗の舞踏。

エロド王「あゝ美事だ！　美事だ！　見い。お前の娘サロメは私の爲に舞踏をした。

來い。來い。サロメ私は約束通りにお前に褒美をやる。私は舞踏の禮をどの様にでもする。さあ望む物を云へ。何を望む？」

サロメ(跪きて)「お願致します。私は銀の皿の中へ、今入れて戴き度いものがございます」

エロド王(笑ひ出す)「銀の皿へか、銀の皿へ、おゝ可愛いゝことを申すな、これ私の可愛いゝ、美しいサロメ。ジュデの娘と云ふ娘の中で、この上もない美しい娘のサロメ。その銀の皿の中へ何を盛ればよいか。よしそれが、どの様なものでも屹度お前にやる、さあ望め、私の富はお前の物だ。サロメ、品を申せ」

サロメ(立ち上つて)「ヨカナーンの首でございます」

王妃エロヂアス「おゝ娘！　宜く言つた！」

エロド王「いけない。いけない！」

王妃エロヂアス「娘、よく望みました！」

エロド王「これ／＼美しいサロメ。そんなことは有るまい、その様な物をお前が欲し

がる筈が無い。母様のつまらぬ言ひ附けを聽いてはならぬ。母様はいつでもお前に祿なことを勸めぬ。あれの言ふことなどを聽いてはならぬ」

サロメ「私は母様の言ふことを聽きは致しませぬ。まつたく。わたくし一人の好みから、銀の皿にヨカナーンの首を入れて頂きたいと申すのでございます。王様！あなたはお誓ひなさいました。お誓ひ遊ばしたことをお忘れになつてはいけませんん」

エロド王「それは知つてゐる。私は神にかけて誓う。サロメ、私は頼む。どうか他の物を望んでくれ。私の王國の半分をぬつだてくれても宜い。私はそれをお前にやるつもりだ。然しお前が今云つた品だけは止めてくれ」

サロメ「私はヨカナーンの首が欲しいのでございます」

エロド王「いや、その樣なものを望むものでない。怖ろしい事だ」

王妃エロヂアス「あなたはお誓ひなさいました。誰も知ひて居ります。貴方は言葉を食むのでゴざいますか」

エロド王「默れ。私はお前に話をして居るのではない」

王妃エロヂアス「娘があの男の首を望むのは尤なことでございます。あの男は私に侮辱を加へました。あの男は私に聞くにたへない事を申しました。あれがさう申すのは畢竟母を思ふ眞心でございます。娘、決して退いてはなりません。王樣はお誓ひなされたのだ。お誓ひなされたのだ」

エロド王「其方は默れ。物を言ふな。サロメ、物の道理をようきゝわけろ、聞きわけがなくてはならぬぞ。私は今迄一度もお前に辛くあつたことはなかつた。私は始終お前を可愛がつて居た——殆ど可愛がり過ぎる程愛して居た。それ故。そのやうな無理を云うてせがむものではない。恐ろしいことだ。お前のせがむことは甚だ恐ろしい事だ。氣味の惡いことだ。全体お前の望むことが眞面目で言うとは思へない。胴から離れた男の首、それはこの上も無い氣味の惡いものだ。見て居ても胸が惡くなる物ではないか。それが何んでお前に面白からふ。いや決して面白いものではない。決してそれもお前が望む筈はない。サロメ、暫く私の言ふこと

をきくが宜い。私は碧玉を持つて居る。それはセザールから私に贈られた大きな碧玉だ。もしこの碧玉を透して見ると、遠方のものまではつきりと見える。セザール自身も曲馬を見に行かれる時、全じ碧玉を携へて行かれるといふことだ。その碧玉はセザールのより大きい世界中でこの上もない大きい碧玉だ。どうだお前それを欲しいとは思はぬか、わしは喜んでお前に與る」

サロメ「私はヨカナーンの首が欲しうございます」

エロド王「お前は私の言ふことを聞かない。又聞かうともしない。しかし私の言ふことを聞け。サロメ！」

サロメ「ヨカナーンの首を……」

エロド王「いや〳〵お前がそれを欲しい筈がない。多分お前は今夜一晩私がお前の顔を見た代償に私を困らせるつもりだ。さうだ。全く私は一晩中お前を見て居た。お前の美しさに私は心を惱ましてゐた。お前が餘り美しかつた故、つひ見過して居た。だが私はもうさうした事を爲ない。品物でも人間でもあまりに見詰めると云ふことはよくない事だ。鏡の外に見て宜いものはない。鏡の見せるものは假面だからな。おい酒だ。酒を持つてきてくれ。咽喉が乾く。サロメ、仲よくしやうそして考へてくれ、……私は何を云はうとして居たか、……あゝさうだつた。サロメ、もそつと近くへ來い。それでは私の言ふことが聞えまい。サロメお前は私の白孔雀を知つて居るだらふな。園の樹立の間を歩いて居る白孔雀を知つて居るだらふ。その嘴には金箔が置いてある。餌にも金箔を置いた穀物を食させる。その足は深紅だ。啼けば雨が降るし、羽を擴げると月が大空に止る。二羽づゝがならんで綠杉とミルテの木の間を歩るいて居る。そしてその一羽づゝに奴隷が附いて居る。そして時々梢の上に飛ぶ、どうかすると芝の上や池のまわりに寢て居る世界中恐らくあれに優つた美しい鳥は居らぬ。世界中のどこの君主でもあれ程の鳥を持つては居ない。セザールすらあの樣な鳥は所持出來ぬ。どうだ私はその孔雀をお前に五十羽もやらふ。さうすればお前の行く所へはどこへでもその孔雀が隨いて行く。その時はお前は大きな白い雲に包まれた月のやうに見ゆるであらふ

私は殘らずお前に遣る。百羽までお前にやる、世界中の帝王でもあれ丈けの孔雀を持つて居るものは一人もない。それを私は皆な遣らふと云ふのだ。だから私の誓つたことで、私を責めないでくれ」（盃の酒を干す）

サロメ「ヨカナーンの首を下さいまし」

王妃エロヂアス「よく言ひました娘。孔雀の話などきかされておゝ馬鹿らしい」

エロドア「默れ。貴樣は何かと云ふと叫ぶ。貴樣の叫び聲は鷲のやうだ。鷹のやうだ貴樣の聲をきくと胸が惡うなる。默つて居れ！　これサロメ！　お前の仕度いと云ふことを考へ直して見るが宜い、あの男は恐らく神から送られて來た者だ。確に神から送られて來たのだ。あれは聖人と云ふものだ。神はあの男の口を藉りて恐ろしき言葉を言はせてゐる。宮殿の中でも砂漠の中でも、同樣に神樣はあの男のかげに添うて居られる。――少くもそのやうな事があるらしいのだ。我々には分らぬが、神が彼を助けてをられる。もしあれが死ぬと、それから災が起らぬとも限らぬ。とに角あの男は死ぬ時には何かしら災が起ると云ふ事を明言して居た

その災は恐らく私の身の上に下るであらふ。御覽。私はここへ來ると、いきなり血に滑つた。そして次いで空に怪音をきいた。恐ろしい大きな羽音を耳にした。それはこの上もない惡い前兆だ。その外に前兆があつたか知れぬが、我々の目や耳に知れないだけで、確かに外にあつたに相違ない。サロメ、お前はまさか私の身に災の來ることを望む筈は無い。だから他のことを望め」

サロメ「私にヨカナーンの首を下さいまし」

エロド王「おゝお前は私がこれ程迄に言うことをきいてくれぬのだな。まあ急かないでくれ。私もすつかり落付いた。私はこの上もなく落付いて來た。どうか聞いてくれ。私はこの土地に、お前の母より未だ見た事の無い寶石をかくして持つて居る。それは月光を幾個もつないだと云はうか。五十許りの月を金の網にかけたとでも言はうか。或國の妃が象牙の樣な乳房の上にかけた首飾だ。それをお前が用ゐたなら、お前は美しいお妃の樣に見ゐるであらふ。――それに私は種類の違つた二つの紫水晶を持つて居る。その一個は生葡萄の樣に黑い。も一つは葡萄酒の

樣に赤い。私は虎の眼の樣な黃玉を持つて居る。又鳩の眼の樣な薄赤味を持た黃玉を持つて居る。猫の目のやうな綠かゝつた黃玉も持つて居る、その猫目石はいつもいつも冷い光をたゞへて居る、そして人の心を悲しくする。暗闇の中に置くことの出來ない玉だ。又、死んだ女子の瞳に似た縞瑪瑙もわしは持つて居る。わしは又月長石と云ふ寶石を持つて居る。それは月が變はる每に寶石の色が變る。日に當ると、それが青くなると云ふ珍らしい玉だ。私は大きい青玉を持つて居る。鷄卵程の大きいものだ。海がその中で渦を卷いてゐる。そして月の滿干でその波の青い色が褪めるといふことがない。わしは橄欖石も、綠玉も、紅玉も、赤縞瑪瑙も、ヒヤジント石も持つて居る。それらを皆なお前に遣る。それを皆な遣つた上に他のもの迄添へてやる。印度王から鸚鵡の羽で造つた扇を送つてくれた。又ミジー王から鷲鳥の羽で織つた衣裳を一組送つてくれた。——私は女共の決して透かして見ることを許さない水晶の玉を持つて居る。それは若い男でもそれを見るものは尻を笞あてられる。私は土耳古玉を三個持つて居る。それを額にあてると世の中にありもせぬ物を想像することが出來るし、それを手に持てば女子を石女にすることが出來る。それはこの上もない、價打ある寶だ。まだ〳〵それだけでは盡きぬ。黑檀の箱の中には金の林檎に似た對の琥珀の盃がある。敵意を持つた者がその盃の中に毒を注ぐと、それは銀の林檎に變つて仕舞ふ。又琥珀の飾箱の中には玻璃を箝めた靴がある。セレーの國から持つて來た袍がある——サロメお前は何が欲しいが。お前の欲しいものをいふが宜い。私は直ぐあげる。たゞ一つを除けば、お前の欲しいといふものは何んでもやる。私の持つてる物なら何んでもやる。たゞ一人人間の命はやられぬといふのだ。サロメ、さあ望むが宜い！大祭司の袍でもやらふ。聖檀の帷でもやらふ？」

ジユデ人「おゝ。おゝ」

サロメ「何にも要りませぬ。ヨカナーンの首を下さいまし」

エロド王（椅子の上によろめき仆る）「あゝ、あれが望む物をやれ。あゝ、この母にしてこの子がある（兵卒1、進みよる。王の手から死の指輪を抜きとつてそれを兵

卒に渡す。兵卒之を首切役に渡す。首切役呆然とする）おゝ誰が私の指輪を抜いたのだ。誰れがわしの酒を飲んだのだ。私の盃には葡萄酒が盛つてあつた筈だ。おゝきつと誰かの上に災が來るに相違ない。（首切役井戸の中に降り行く）おゝ私は何故誓言をしたのであらふ。王者は誓言をすべきではなかつた。それを守らぬ程恐しいことはない」

王妃エロヂアス「私は妃かよくしたと思ひます」

エロド王「おゝ屹度誰かの上に災か下る！」

サロメ、井戸の上によりかゝり耳を立てゝきく。

サロメ「物音もしない。何んにもしない！　あの男はなぜ聲を立てぬのであらふ！おゝ誰れでも、もし私を殺ろしに來たならば私は聲を立てゝやる。あくまで妨いでやる。どうしておとなしく殺ろされなどするものか。切れッ……ナアマン切れッ、私がお前に言うて居る。――どうしたのであらふ。何にも聽えない。氣味の惡い程靜かだ。おゝ、何か地上に落ちたらしい。何か落ちた音がした。さては首切役がおちけ附いて劒をおとしたのだ。おゝ臆病者は殺ろしえないと見える。奴隷め、兵卒をやるが宜い。

エロヂアスの舍人を見て聲をかく。

お前此處へお出で！　お前はさつき死んだ男の親友だとお云ひだね。よし〳〵まだ人が死に足りないのだ。兵卒等にこゝへ下りて行つて、私の望むものを。王樣のお約束のものを、私の物を取つてお出でと言ひつけておくれ。

舍人、恐ろしそうに后退さりする。兵卒等に、

兵卒達！　こゝへお出で！　お前達はこの井戸の中へ下りて、あの男の首をとつて來ておくれ。とつて來てをおくれ！

兵卒等後退さりする。王に向ひ、

おゝ王樣！　兵卒等に申し附けてヨカナーンの首を取つて下さいまし。

この時黑い太きな腕、首切役の腕が銀の楯にヨカナーンの首鮮血したゝるを載せたるまゝ井戸の上に出づ。

サロメ、その首を取る。エロド王冠にて顔を蔽う。王妃エロヂャアス微笑をふくんで扇をつかふ。ナザルト人等跪きて祈り始む。

おゝ、ヨカナーン！　お前この口に接吻をさせておくれなかつたのだね。よしよし、それから存分、私はお前に接吻してやりませう。その齒で、熱した果物を嚙むやうに嚙んでやりませう。さあ、今こそ私は接吻してあげるのだよ。でもヨカナーン。どうしてお前は私の顔を見ないのだえ。さう〳〵、憤りと、輕るしめとを含んだお前の眼はもう閉ぢてしまつたのだね。ヨカナーン。眼を開けてごらんヨカナーン、お前の目蓋を開いてごらん！　なぜお前は私の顔を見ないのだえ。お前、私の顔を見ないのは私が怖いのではないかえ――それから赤蛇のやうな毒を吐きかけたお前の舌。あれもう動かなくなつたのだね、もう何も云はなくなつたのだね、あれ程私に毒づいた舌が動かなくなつたんだよ。不思儀じやないかいヨカナーン、お前は私をお嫌いなすつたね。私の要求をはね附けたわねえ。私に惡口の限りを云つたわねえ。お前は私をエロヂアスの娘。ジュデの女王サロメをさながら賣婦のやうに見つたはねえ。それが、私は生きて居てお前は死んだ、そしてその首は今私のものになつたのだよ。私はそれを今自分の思ひ通りにすることが出來るのだよ。たとへば犬に投げてやることも出來る――空飛ぶ鳥に與へることも出來る。犬が食べあきたら野の鳥が啄くであらふ。――ヨカナーン。ヨカナーン！　お前は私のこの世で一番好ましく思つた一人の男であつた。世の中の他の男は誰も彼も私に厭な氣を起させた。けれどお前は美しかつた。お前の体は銀の礎の上にたてる象牙の柱であつた。この世の中でどんなものでもお前の身体ほど白いものはなかつた。お前の髪の毛のやうに黑く艶のあるものは無かつた。お前の口より赤いものはなかつた。お前の聲は異香の薫ずる香爐であつた。その顔を見詰めて居ると不思儀な音樂が聞えてきました。ヨカナーン！　お前なぜ私の顔を見てくれなかつたでせう。よくもお前はその兩手の蔭に、その惡口の蔭にお前の美しい顔を隱してしまつたのね、よくもお前は自分の神を見ようとする布をとつてお前の頭を隱したのね、成程ヨカナーン、お前は神を見たかも知れぬ、

されど、されど、されど、どうして私を見ずに仕舞つたの。もしお前が私を見たならば、お前はきつと私を愛してくれたでせう。あゝヨカナーン。私は本當にお前を見ました。そして本當にお前を愛してやつたのに、……どんなにお前を強く愛したらふのに、ヨカナーン、今でも私、お前を愛して居るよ。私はお前の美さに陷いつて居ました。お前の肉体に餓えて居ました。それは酒も果物も私の心の餓えや渇きを鎮め得なかつたのだ、ヨカナーン、これから私、どうしたら宜しいでせう。おゝ川を流るゝ水も、海に湛へてある海の水も、私の胸の火を消すことは出來なんだ。私は女王だつた。それをお前は卑しい者にした。私は處女であつたその花をお前は枯らした。私は無邪清淨であつた。お前は私の血脈の中に永劫に消ねない情慾の火をともした。——あゝ、あゝ。お前はなぜ私の顔を見ておくれでなかつたらふねね。ヨカナーン。お前が私の顔を見てさへくれたなら。きつと私を愛しておくれだつたらふにねー——あゝお前が屹度愛してくれたであらふと云ふことを私は知つてゐる。愛の深秘は死の深秘より大きいもの、愛の外に人はも

何も見ることは要らないだのよ！」

エロド王「おゝ妖怪だ！　お前の娘は妖怪だ！　あれの行つて居ることは一切妖怪の仕業だ。彼れの行は大きな罪に當る、彼はまだ知られぬ神に對して恐ろしい罪を犯して居る！」

王妃エロヂアス「私は、娘の仕た事に滿足して居ります。もういつまでもこうやつて此處に居りたうございます」

エロド王（立上りて）「不義邪婬の女！　私はもう此處に居られぬ、——どうしても災が下る。マナッセー、イサカル、オヂャス、炬火を消せ。私は見るに忍びぬ、私はその樣なものを見るに忍びぬ、炬火を消せ！　月を隱せ、星をさへぎれ！　エロヂアス、我々は奥へ隱れやう、私は震へを生じた」

奴隷炬火の火を消す。星隱る。大きな黑雲月の上にかくる。やがて隱して了ふ舞台暗黑となる。王階段を下り初む。

サロメの聲（暗中に）「あゝヨカナーン！　私は今お前に接吻する。私はお前に接吻を

した！　お前の唇には苦味がある。血の味だらふ。いゝや、これがきつと戀の味だらふ。戀は苦い味がするとか。おゝヨカナーン、私はおまへの口に接吻したよ思ふ存分接吻してよ」

一筋の月光、サロメの上に落ちて恐ろしき姿を現出す。

エロド王（振返つて）「おゝあれなる女子を殺せ!!」

兵卒等飛びかゝり、エロメヤスの娘ジユデ女王サロメを楯の下に厭し殺す。

――幕――

櫻の廢園

――（人　物）――

龍子夫人。リユボウ・アンドレーエウナ・ニーネフスカヤ。寡婦、女主人
愛　子。アーニヤ。　夫人の娘（十七）
輪喜子。ワーリヤ。　夫人の養女（二十四）
嘉平治。レオニード・アンドレーウイッチ・ガーエフ。夫人の兄
魯馬吉。エルモライ・アレクセイウイッチ・ロパーヒン。商人
土井文雄。ペトル・セルゲウイッチ・トロフイーモフ。大學生
比須吉。シミオーノフ・ピユーシユチク。地主
岩　野。シヤルロツタ・イワーノウナ。家庭教師
海老平。セミオン・パンテレーウイッチ・エピホウドフ。執事
おつる。ツニーシヤ。　女中
房兵衛。フィルス。　老僕
彌　吉。ヤーシヤ。　若い僕
外浮浪人、郵便局員、驛長。

戲曲『櫻の廢園』

テエホウ著
高山豐花譯

‖第一幕‖

子供達に與へられたる部屋。一の扉により娘愛子の部屋に通ず。
夜明前、太陽がそろ〳〵昇りかけて居る。五月。櫻の花が滿開、
朝の冷氣に外氣を防ぐために窓の戸を閉ず。
女中おつるが蠟燭を以つて出場、后から商人魯馬吉續く。

魯馬吉『さあ汽車が着いたよ、兎に角無事に着いちやあ目出度いて え もんだ。さて何時たらふね』

おつる『かれこれ三時ですよ（蠟燭を消す）ホラもう明るくなりました』

魯馬吉『どうも汽車が馬鹿に遲れたせ、二時間はもうタップリだな、然し俺も糎がゆるんでゐるよ、停車場へお迎へに行くつもりでわざ〳〵やつて來たものを、椅子に掛けたなり、つひうと〳〵とやつてしまつたんさ。カラ世話はねえ、お前お起れば宜かつたになあ』

おつる『だつて妾はお前さんがお出かけになつたものとばかり思つてゐましたから、（耳をたて）おや、もうお着きかしら』

魯馬吉（きゝ耳を立て）『いやまだだらふ、瀛車が着いたつて、荷物を受取つたり、あれこれとナカ〳〵用があるからな。――奥樣はもう五年も外國に行つて居られたのだからサゾ變つたらふな。奥樣て云へばホントに氣の置けないさつぱりした宜い方だつたせ、今でも覺えてるが、俺の十五の小僧の時だつたよ、俺の親父はその時分村で小商をして居たが、その親父奴、或時俺の向う面を拳固でイヤと云ふ程撲り附けやあがつて鼻血を出したことがあつたが、その時だつた、俺は親父と二人でここのお邸へ厄介になる樣になつたんさ。親父は酔拂ひでな。スルト奥さんが――思ひ出すと昨日のことのやうだつたよ、その時分は脊のすらりとした若いお孃さんで、そりあ大變な別嬪さんだつた。そのお孃さんが、さうさうこの部屋だつたな、この洗面台の所へ俺を連れて來て下すつて、『お泣きでないよ、

ねえ、今にお婿さんになれば直るから、小さなお百姓さん！」とこういふのさ、
――「小さなお百姓さんか――成程俺の親父は百姓だつた。それを今はこうして
白チョッキに赤皮の長靴なんかでしやれ込んで居るが、アハ、、、まあ豚に衣裳
さ――そりやあ金だけはしこたま出來たもの、、よく見れば矢張り百姓は百姓よ
何處か垢抜けのしない所があるからな。（書物を數頁めくり乍）この本なんか讀ん
で見るもの、、一向に譯が分らねねからッヒうと〳〵として仕舞うのさ」
おつる『昨夜は犬が夜つぴて寢ませんでした。犬でも御主人のお歸りが分るかしら」
魯馬吉「おつる。お前どうしたと云ふんだい、お前はまるで……」
おつる『妾手がふるへるの、それに目まひがするんですよ」
魯馬吉「フムお前は全体キャシャ過ぎるな、だからそんな風になる、まるでお孃樣の
やうにしやれ込んでゐるじやないか、ね、頭を見ろ、頭を！　そんな法はなから
ふせ、人は身分を考へなけりやならん」
この時、執事海老平。短い脊廣にピカ〳〵磨み上げた、キュキュと鳴る長靴を穿き

手に花束を持ち入り來り、入口に花束を取り落す。
海老平「園丁がこれをよこしたから、食堂へ立てるやうにいつてね」
おつるに渡す。
魯馬吉「食堂へ行つたら歸へりに俺にクワスを一杯持つて來てくれ」
おつる「ハイ畏まりました」
おつる立ち去る。
海老平「今朝の寒さはどうです。全く變調ですな櫻の滿開だと云ふに寒暖計は三度で
す、こんな馬鹿な陽氣たらありませんせ、どうも宜い工合に行かないもんですな
あ。宜い工合に行かないと云へばこの靴だが――これは二日前に買つたのですが
どうも極りの惡い程キュ〳〵鳴りやがるんです。全体何を塗つたんでせうなあ」
魯馬吉「もう止せ澤山だ。聽きたくもねね靴の自慢なんか」
海老平「運命とでも云ふのですかなあ、私には毎日不仕合せが附き纏うんです、――
だけどね、私はそれに對して別に悲觀なんかしないんで、もう慣れつ子になつて

ますからなあ』

おつる、クワスをコップに注いで入り來る。魯馬吉に渡す。

海老平『私は斯うしては居られなかつたのだよ、行かなければならぬ。(卓子に突き當る)ホイ失敗又かい、兎角こんなことで』

海考平去る。

おつる『實はね、海老平さんが、私に結婚を申し込んだのですよ』

魯馬吉『フウン』

おつる『私どうしたら宜いでせうか。彼の人はあの通り堅い人ですけれど、たゞ時々何んだか人がきいても一向分らないことなんか云ひ出しましてね、それは心持はやさしい上に人も宜いんですけれど、何んだかあの人の云ふ意味が妾にはのみ込めないんですもの、ですけれど、どつちかと云ふと、私あの人が好きですわ。あの人の方はもう私に夢中なんですわ、どう云ふわけかあの人は運がわるくつて、毎日何かしら身の上にあるんですわ、だから世間の人は「二十二の不仕合せ」と

いつて綽名をつけてるんです』

魯馬吉(耳を立て)『ヤッ。今度こそは愈々着いたやうだぞ』

おつる『左樣よ、着きなすつたわ、私どうしたんだらふ身体が冷切つてしまつたわ』

魯馬吉『確にお着だ——正にそれに相違なし、サア迎へに出やうぜ、所で奥さんは私を覺えているかしら、何んしろ五年もお目にかゝらないんだからな』

おつる『私どうしやう、グラ〳〵として倒れさうだわ』

一台の馬車が着く音がする。

魯馬吉とおつるとが急いで出て行く。(舞台空虛)

老僕房兵衛が杖にすがつて通りすぎる。房兵衛は古風な下男の着る禮服を着け山高帽子を冠つてゐる。やがて『此方から行きませう』と云ふ聲と共に龍子夫人。令嬢愛子、頭巾附の外套を着て鎖のついた犬を引き連れながら一同入り來る。荷物をかついだ僕。魯馬吉。おつる。引續き入り來る。

愛子『ねーこのお部屋を拔けて行きませう。母樣！　貴方はこのお部屋覺えていらつ

しつて？』

龍子（感慨にみちて）『アゝ子供部屋だね』

輪喜子『何んて寒いのでせう。私、手がかじかんでしまうわ。（夫人に）母様！　あなたの白いお部屋と紫のお部屋、二つともそつくりしてゐてよ』

龍子『おゝ懐しい小供部屋。わたしがまだ小供の時、始終寝て居た小供部屋（泣きながら）私、今でも小娘なやうなんですもの。（輪氣子に接吻しながら）輪喜子や、些つとも變らないねえ、この娘はホントニ尼さんの様だよ、房兵衛も直ぐ分つたよ』

嘉平治『お前の乘つて來た瀧車は二時間も遅れた。お前これはどう思う、お前によく似て居てキチョーメンだ』

愛子と海老平とを殘して立ち去る。

愛子『私、道中四晩も續けて眠ないのよ、もう凍え死にさうだつたわ』

海老平『さうさう、お嬢様がお立ちになつた時は四年前でございい升たね、この時は雪があつてひどく寒うございましたが――こうして御無事にお歸りになつて、こんな喜ばしいことはございませぬ。（愛子に接吻する）私、どんなにお嬢様をお待ちしたでせう。わたくしの歡喜を作つて下さるお嬢様、私の光を與へて下さるお嬢様私はお嬢様に對して早刻お談しせんければならぬ事がございますのです、ハイ

愛子（詰らな想に）『また何か初まつたの』

もう一分間も待たれぬ程忙はしない事でございます』

おつる『アノ執事の海老平が私に結婚を申し込んだのでございます』

愛子『マア何だと思つたら、相變らずの談ね（髪を直し）アラッ、私、ピンを皆な落してしまつたわ』

旅に疲れたらしくヒョロ〳〵する。

おつる『お嬢様。私どうして宜しいか分らないのですわ、あの人は私を愛して居りますのです』

愛子（自分の室を覗き乍、懐し相に）『おゝ私の部屋、私の窓！　私旅なんか行つてゐ

なかつたやうだわ、アヽ私家へ歸つたの！　朝になつたら園の中を駈けて見ませう——本當にバリーから瀛車の道中でマンジリともしなかつたのだから、私眠りさへすれば宜かつたのに」

おつる「アノ土井文雄さまが一昨日お着きでございますの」

愛子「ママヽ（嬉れしさうに）文雄さんが」

おつる「外のお湯殿に泊つていらつしやるのですよ、お邪魔になると不可ないつて仰言つて——行つてお起し申すと宜いのですけれど、輪喜子樣がお起ししてわ不可ないとおつしやるのですから」

輪喜子出で來る。

輪喜子「おつるや、母樣がコーヒを召し上りたいと仰言つてよ、お前早く行つてさし上げておくれ」

おつる「ハイ、唯今」（出て行く）

輪喜子「ママ宜かつわね、貴女が歸つてきてくれてさ、これら内の人になるんだわね え」

愛子「私どんな目にあつたとお思ひ？」

輪喜子「それは私に別つてよ」

愛子「私、ここを立つたのは神聖週間でしたわね、岩野（家庭教師）は途中しつきり無しにおしやべりをして、合間々々には手品なんかを使ふんですもの、一体どうしてあんな人を私の頸にぶらさげたのさ」

輪喜子「だつて、あんた一人で旅へ出せないわ。十七の娘をさ」

愛子「巴里に着いた時の寒さつたらなかつたのよ、地面に一杯雪があつたの、私ふらんす語が出來ないでせう。母樣は大きな家の五階に住んでいらつやつてね、私着いた時には多勢のフランス人が來ているの、一人カトリックの坊さんか本を讀んで居たの、その不愉快たらないの、それに煙草の煙で濛々してゐるんでせう。私母樣がお氣の毒になつたので、いきなり頭を両腕で確かり抱きしめて、いつさゐも離さなかつたのよ、スルト母樣も私にキスして泣いていらつしつたわ」

輪喜子（泣き乍）「そんな悪い談は止めて頂戴」
愛子「メントナの別荘は賣つて仕舞つて、何も財産か殘つて居ないんでせう。それに私だつて一文なしでせう、だから私達はここまでやつと着いたのよ、だけど母さまは案外平氣なんだからね、食事するために停車場の食堂へ入るんでせう、母様は一ばん上等のお料理を注文するやう、ボーイに一フロリンづゝ祝儀をやるの、それに岩野が矢張りさうなんでせう。それ許りか彌吉までか自分の分を注文するでせう、ホントに恐ろしい位よ、彌吉は母様が新しく雇つた下男よ、その男まで私達はつれて歸つたんだわ」
輪喜子「エゝその男には私も逢つてよ」
愛子「ねへ留守のこと何もかも談して頂戴、……アノ抵當の利子は拂へて」
輪喜子「拂へる譯がないじやありませんか」
愛子「どうしたら宜いでせう」
輪喜子「この八月には財産の殘らずが賣られてしまふのよ」

輪喜子「マア、どうしませう。どうしたら宜いでせう」
この時、魯馬吉扉口からのぞき、
魯馬吉「モ――（牡牛の眞似をする、また出て行く）
輪喜子（腹を抱えて笑ひ乍、扉の方に拳を上げ）「アラ、打つてやるから」
愛子「輪喜さん、あの方貴方に結婚を申込んで（輪喜子頭を振る）でもあの人屹度貴方を愛してゐるわ、なぜ話し合はないの、それとも外に當があつて」
輪喜子「だつてあの人はそれは〳〵忙しない人でせう。私のことなんか考へて居ないんだわ――それに厭になつて仕舞うわ、あの人は誰れに逢つても、直ぐと私に結婚するやうなことを云ひふらすんでせう、だけど無論何んの關係もないんだわ」
愛子「それはさうと私巴里で風船に乘つてよ」
輪喜子「さう。マア、貴方が歸つてくれてどんなに嬉しいでせう。私の可愛らしい別嬪が……」
おつる珈琲を持ち出して來て、珈琲を沸す。

輪喜子「私、一日中、彼れ此れに世話を燒いて廻り乍いろ〳〵行末のことを考へて居るのよ、私達はどうすれば宜いんだらうふつて――まあ、貴女を早くお金持の所へお嫁にやつて、私の重荷を下ろして、其の後で私、尼寺へでも行つて――それからキエフへ行き、モスクワへ行きませう。聖地廻りをして居たら、どんなに樂しからふつて……」

愛子「オヤ烏が庭で鳴いてるわ、何時でせう」

輪喜子「もう二時ズツト過ぎでせう。あなたもう寢なければ駄目だわ(愛子を送り乍)どんなに樂しいことでせう」

彌吉旅行鞄とショールとを持つて出て來る。

彌吉(舞台を通り乍優しく)「此處を通りましても宜しうございますか、お嬢樣」

おつる「すつかり見違へて仕舞つたわ、彌吉さん、外國へ行つてくると違うもんだね――」

彌吉「フム、お前さんは誰れだつけ」

おつる「お前さんがここを立つて行く時には私はこんな小さかつたの(手眞似して)私おつるなのお覺があつて」

彌吉「オヽ、左樣左樣、おつるか」

其處ら見廻して、忽然女に抱き附く。おつるキャッと悲鳴を上げる、途端皿を取り落す、彌吉慌てゝ逃げ行く。

輪喜子(扉から顏を出して不機嫌に)「え何うしたのさ」

おつる(涙組んで)「お皿を壞しました」

輪喜子「フム、さぞ宜い事が來るだらふよ」

愛子部屋から出て來り、

愛子「母樣に土井の來てること言はなければならないわ」

輪喜子「私、あの人を起さないやうに言ひつけて置いたのよ」

愛子(考へるように)「さうだわ、父樣が亡くなつて六年になるわね、父樣が亡くなるとすぐ、弟の栗雄が河に溺れたのだつたわ、栗雄は七つになつた許りの可愛いゝ

子供だつたわ、スルト母様がそれつきり家を出ておしまひになつたの、私、母様がどんなに悲しかつたかお心が分つて居たわ、それが母様に通じたならねゐ——文雄さんは栗雄の先生だつたのだから、あの人の顔を見ると、母様を思ひ出してよ」

老僕房兵衛長い上着に白のチョッキを着て出て來る。珈琲沸の方へ行きかけて心配さうに、

房兵衛『奥様はここで珈琲を召し上るのだ。（おつるに向ひ厳格に）これこれ、クリームはどうした』

おつる『あらッ、さうさう』（慌てゝ出て行く）

房兵衛（珈琲沸の傍をウロ〳〵しながら）『何んて畜生だらう。（口の中で）奥様は巴里からお歸へりなされた。旦那様は昔は驛馬車でパリーへ行つたもんだが（笑ふ）

輪喜子『爺や、何の用だい』

房兵衛『御免下さいましよ、奥様がお歸へりになりましたな、ほんとに懐しう思ひまして、これでお目にかゝれまするもう爺は死んでも思ひ置くことはございませぬ（嬉れし泣きに泣く）

龍子夫人。魯馬吉。嘉平治。比須吉出で來る。地主比須吉はロシヤ風のヅボンに薄い上着をつけて磨る、嘉平治入り乍、玉を突く手眞似し乍入り來る。

龍子夫人『何んと云ふのでしたつけ。斯うと赤玉が陽で、眞中で二度突きでしたわねえ——』

嘉平治『私は赤玉を右で切る——ナア龍子。昔私達が子供であつた頃は二人並んでこの室で寢たつけな。それが今は俺はもう五十一になる、考へると嘘のやうだ』

魯馬吉『左様で、月日の立つのは早うございます』

嘉平治『何んじやと』

魯馬吉『月日の立つのは速いと申しましたので』

嘉平治『オヤ麝香草の匂ひがする』

『私、休みますわ、母様、お休み遊ばせ（母に接吻する）

龍子夫人「おやお休みかハ(手に接吻する)家へ歸つて嬉れしいだらうねえ、私は何んだかそわ〳〵してまだ正氣になれないよ」

愛子「叔父様、お休み遊ばせ」

嘉平治(愛子の顏と手とに接吻し)「さあお休みよ。本當にお前母様とそつくりだよ、(夫人に)お前もこの子の年頃には丁度こんな美しい娘だつたよ」

愛子。魯馬吉と比須吉とに握手して扉をしめて中に入る。

龍子夫人「あの子も酷く疲れて居るんですよ」

比須吉「無理はありません長い道中ですからなあ」

輪喜子(魯馬吉と比須吉に)「皆さんもう二時を過ぎました。皆様お休みになつては如何——」

龍子夫人「輪喜子や、お前さん相變らずねゑ(彼女を引き寄せ接吻し乍)それでは珈琲を飲んでソロ〳〵お引けとしませう(房兵衛珈琲をすゝむ)有難う。私珈琲を飲むのがもう癖になつてね、晝間でも夜分でも飲むんですよ、有難う爺や(房兵衛に接吻する)

輪喜子「荷物はのこらず運んだでせうか、調べて來ますわ(出て行く)

龍子夫人「私、腰を落けてゐられないんですよ、もう跳ねまわつて腕を振りまはしたい位ですよ(顏を手でかくし)あゝあゝ自分の生れた土地ほど宜いものはないよ、それが巴里のように美しくつても、私、もう瀛車の窓から外を見て居られなかつたよ、泣いて許り居てね(泣く)でも珈琲を飲まなくちやあ、有り難う、爺やほんとに有り難う。私、爺が達者でゐてくれてこんな嬉れしいことはないよ」

房兵衛「一昨日でございます」

嘉平治「耳が遠いんだよ」

魯馬吉「所で私は何時でもお邪魔をして居て、貴方のお顏を見たり、彼方のお話を伺つたりしたいのですが、今朝五時には商賣用でハルコウまで行かなければなりません、どうも殘念です」

比須吉(重い溜息をして)「以前より餘計奇麗になつた。それに巴里仕立の衣裳でなあ

車の輪ごと入れ上げたくなるよ」

魯馬吉「お兄様の奥様はいつも私の事を俗物だとか、金溜め器械だとか仰言いますが私は少しも構ひません、どうか貴方だけは昔通り私を信用して下さい。昔通り、どうかその不思議なる優しき眼で見て頂きたい。お惠み深い神様！　私の父親は貴方のお父様の農奴でした。又その前の祖父様の農奴でした。そして貴方には昔から隨分深切を頂きました、そして失禮乍御兄弟のやうに存じて居ります。いや御兄弟以上に思つて居ります」

龍子夫人「私、もう嬉れしくつて、熟つとしては居られない（感動したやうに歩るきまはり）こんなに幸福ではとても堪まらない、私は馬鹿ですよ、皆様笑つて下さいな、おゝ私の戸棚！（戸棚に接吻し）おゝ私の戸！」

嘉平治「所でお前が行つてから乳母が死にました」

龍子夫人（腰を掛け珈琲を飲み乍）「ほんに氣の毒なことをしましたわ、手紙でよこしてくれましたつけ」

嘉平治「それからアナスタシーも死んだよ。それから獄吏のベトルシカは家を飛び出して、今では町の警視の所へ勤めて居る」

嘉平治ポケットから氷砂糖を出して舐る。

比須吉「私の娘の順子から宜しく申しました」

魯馬吉「今日は何んと云ふ樂しいのでせう、でもつと愉快の話を皆様と仕度いのですが（時計を出して見て）私もう、お暇しなければなりません　時間がございませんから、一寸申し上げて置き升が、御承知の通りこちらの實櫻の園が抵當になつて居て、その借財を償却するために、只今競賣になつて居ります。そしてその期日は八月二十二日と定まつてゐます、然し奥様。それについての御心配は要らないかと思ひますからゆつくり休息なさいませ。何故と申せばそれは逃れる方法があるのですから――それについて私の腹案をこゝで申し上げます。ようく聽いて下さいませ。

御所有の園地は町からたつた十五哩離れて居る丈けですが。鉄道もすぐ傍を通つ

て居ります。で、この園と、河に附いた土地一帶を建築敷地に區切るのですな、そしてその區切つたのを別莊に貸しつけるのです、スルト一年少くとも二千五百ポンドの收入が上ります、ハイその計算は極めて確實です」

嘉平治「これ何を途方も無いことを云ひ出すのだ」

龍子夫人「魯馬吉さん、私、どうもお前さんの言ふ事が飲み込めません」

魯馬吉「おきゝ下さい、も少し精細に且つ數的に申上げ升、まづ一町歩につき年少くとも十五圓の地代が上るからです。唯今貸地の廣告を出せばこの秋までは全部借手がついて、もう一寸の地だつてお手に殘らない程になります、そして其が殘らず貸料になるのです。で、要言しますと　貴女はお目度うございます——そして貴女は救はれたといふものです。何しろ前には見晴らしの佳い河を扣へて、無類飛切の位置ですからな。勿論、それには土地整理をつけ、土地を美麗にせねばなりません、舊い建物なぞは邪魔です、例へばこの家などはもう何の役にも立ちませんから、早速除り拂ふ。それから櫻畑なんかも伐り拂はねばなりません」

龍子夫人「一寸待つて下さい。櫻畑を伐り拂うんですつて、失禮ですが貴所は途方もない無茶なことを仰言る。考へて御覽なさいよ、この縣で何が注目すべきか、實際人の驚くと云ふのは宅の櫻畑ではありませんか」

魯馬吉「何、唯大きいと云ふ外に、大した事はありませんや、それに二年目に一度實を結ぶだけです。そしてその實をどうするといふことも無いのです、誰も買手はないのだから」

龍子夫人「だつて家の櫻の畑はアンドレーエフスキーの百科辭典にまで出て居る」

魯馬吉（時計をながめ）「とに角決心なさるか、何んとかお考へを極めないと、この八月二十二日には厭でもその光輝ある櫻の畑と財產全部とを併せて競賣に附せられるのですよ、決心して下さい、もう外に方法は無いのです、絶對に無い事を私は誓ひます」

房兵衛「あゝ五十年も前にやあ、櫻の實を乾したり、砂糖漬にしたり、ジャムに作らへたり爲たんだつけ、それから乾いた實は……」

嘉平治『房兵衛獣つとれ』
房兵衛『乾した實を車に積んでモスクワやハルコフへ送つたもんだ、えらい金が上つたつけな。乾した實は柔かで水氣があつて、甘くつて、宜い匂ひがしたからなあ
その時分は皆ながやり方を知つて居ましたつけ』
龍子夫人『ぢやあどうして今は爲ないの』
房兵衛『忘れたですな、誰もどうしてやるか覺えてゐないですね』
魯馬吉（夫人に『巴里はどうでございましたか、素敵に賑やかでせうな。それから蛙は召し上りましたかな』
龍子夫人『鰐は食べて見ました』
魯馬吉『鰐を食りなすつた、どうも早や驚いた』
魯馬吉『所も時勢によつて變りますな。此處も近頃までは地主と小作の百姓許りでしたが、この頃は別莊客がボッ〳〵やつて來るやうになりましたからなあ。町と云ふ町はこの頃は別莊がぎつしりと出來ましたな、今后二十年も經つと別莊持は殖

える一方でせう。今の所、さうした連中は大抵グュラレタに出て呑氣に茶を飲んで居る丈けですが、やがてその土地で農作が初まる頃になれば、その立ち腐れの櫻畑にもまあ花が咲くと云ふものです』
嘉平治（憤つた聲で）『何を下らんことを云はつしやる』
輪喜子と愛子とが入り來る。鍵を持つてカチャ〳〵戸棚を開け乍、
輪喜子『母様の所へ電報か二通來てゐますよ』
龍子夫人（封を切つたまゝで中をよまず）『バリーから來たんだよ』
喜平治『龍子や、お前知とるかいこの戸棚の年齢をさ、一週間許前の事だつたよ、私は何心なく抽斗を開けて見た所が、そこには買入れた日附の燒印があつてな、それによつて見ると、もう百年經つとる、お前それをどう思うな、百年祭でもしてやつては――それはたとへは生命のないものでも、何んでも歴史ある戸棚だよ』
比須吉（驚愕して）『え、百年ですつて』
嘉平治（戸棚にさはつて見て）『左樣だ、全く不思儀だよ、……愛すべき、そして尊敬

すべき戸棚！ 百年以上、正義と優美との高貴なる理想に向つて奮闘したり！君！君の生涯に向つて名譽と榮光とあれ――有用の爲に、勞働に向つてなしたる君が無言の說敎は百年の長年月、少しの休息もなかつたのである（泣く）あゝ君は、我等人類の累代に亘つて不撓の勇氣を支持して來た。君はよりよき未來に對する信仰を支持し且我等のために生存の理想と社會的自覺とを美成し來つたのだ」

魯馬吉「さう〳〵」

龍子夫人「兄い樣貴方相變らずね」

嘉平治「隅は白玉だで……眞中の赤玉を切れ（球撞）

魯馬吉（時計を出し）「さて愈々出掛けなければならない」

彌吉（小筐を夫人に渡し）「今丸藥を上りますか」

比須吉「奥さま、あなたお藥なぞ上ることはありません、そんな藥は毒にも藥にもなりやしません、俺におくれ（筐を殘らず掌にあけ一飲みに一杯のクワスと共に飲み込む）ほらどうだ」

龍子夫人（惘れて）「貴方所どうかなすつたの」

比須吉「皆んな飲んでしまつた」

魯馬吉「何んと云ふ食ひ拔け」

一同笑ふ。

房兵衛「あの人達は前々週來なすつて、胡瓜の漬物を三升食べなされた（口の中で）

龍子夫人「爺や、何を言つているの」

輪喜子「もう三年許、あんな風に口の中でゴト〳〵云つてゐるのよ」

彌吉「ボケたんだらふ！ 無理はねえ年齒だから」

家庭敎師岩野、痩せた身体へ白服をつけ、腰に柄眼鏡を下げで出で來る。

魯馬吉「ヤア岩野さん、失禮しましたね、貴方女にはまだ御挨拶をせなかつた（接吻しやうと身構へる）

岩野（手を引き込め）「止めませう。手に接吻を許すと、此度は腕に……それから頬につて云ふでせう」

魯馬吉「どうも今日は干支か惡い、岩野さん私に手品をして見せて下さい」
龍子夫人「本當に爲て見せて下ださいな」
岩野「いゝえ、私、もう寢みたいのですから(出て行く)
魯馬吉「ゐゝでは三週間后又お目にかゝります(夫人の手に接吻する)では左樣なら、
(嘉平治に)では暫らく・(比須吉に、輪喜子、房兵衛、彌吉に握手し)えゝ行くのかな(夫人に向ひ)別莊地になさる御決心かつきましたらお知らせを願ひます、五万圓位は眞ぐに借りて上げますから、どうか眞面目にお考へ下さい」
輪喜子(憤つた聲に)「もういゝ加減にお歸んなさい」
魯馬吉「ハイ〳〵行きますよ、行きますよ(出て行く)
嘉平治「どうもよく饒舌る男だ。輪喜子、お前あの男と結婚するんだつてな」
輪喜子「アラ、もう厭よ、叔父さん餘計な事仰言つて」
龍子夫人「輪喜子、私は喜んでゐるのだよ、あの人は立派な人です」
比須吉「そりやあ全く左樣です、どうも偉い人物です。家の嬶も左樣云つて居ました……何んだか種々の事をね 鼾をかいて寢る、やがて眼を覺し)時に奥樣、二百五十圓程拜借願へませんかな、明日は抵當の利子を拂はなければありません」
輪喜子(呆れた樣に)駄目だよ〳〵」
龍子夫人「本等に家には金は無いのだよ」
比須吉「ぢやあ何處かで見附かるでせう、(笑つて)私はどんな場合でも落膽しませんこの前もね、此度こそは俺は駄目だ、いよ〳〵破産かと思つて居ると、どうです妙なものじやありませんか、鐵道が私の土地の上に敷かることになつて賠償金がポコッ手に入つたでせう、だから又左樣云ふ都合に行かんとも限りません、今日は駄目でも明日は何か起つて來るものです、ですから落膽はしませんよ、娘のだい子が當籤を持つてゐますから、二十万圓當るかも知れない」
龍子夫人「珈琲を飲みましたから、床へ這入りませう」
房兵衛(嘉平治の服にブラシを掛け乍)「まだ外のズボンを穿きなすつたね、私どうすれば宜いか」

輪喜子（そつと）「愛ちやんは眠つててよ。（靜に窓を明ける）もう寒くはありませんわ
ア、日が出ました、母樣御覽遊ばせ、樹が見事ですこと、ア、清々する、何んて
宜い風でせう、鳥も歌つてますわ」
嘉平治（外の窓を明け）「龍子お前覺えて在でかい、あの長い道ねえ御覽、樹と樹との
間をリボンのやうに長くつゞいて居るだらふ、あれが月夜の晩には銀のやうに光
つたのだよ、お前それを覺えてお居だらふ」
龍子夫人「ハイ忘れてどうしませう。懷かしい幸福であつた子供の時を……いつもこ
の子供部屋に寢てゐましたね、いつも窓から庭を眺めて暮らしましたわ、そして
幸福が毎朝私共と一緒に眼をさましました、園はその時分とちつとも變らないわ
何一つ變つた所はない（嬉れしさうに笑つて）おゝ私の櫻の園！」
嘉平治「この畑か借金の代りに賣り拂はれてしまふ。おゝそんなことが有りさうもな
いことだが」
龍子夫人「アラ、私の母樣が園の中を歩いていらつしやる、オ、白い服を着て、アレ
本當の母樣だよ」
嘉平治「何處へ」
輪喜子「まあどうなすつたのですよ」
龍子夫人「アゝアゝ矢張り誰も居なかつた。たゞさう見えた丈けだつた。彼處の曲り
角に母樣が立つて被入ると思つたら、曲つた古い木だつたわ」
土井文雄古ぼけた學生服に眼鏡をかけて出て來る。
龍子夫人「おゝ何んと云ふ立派な園でせう。白い花が一面に咲いてゐて、その上に青
い空が輝いて居る」
文雄「おゝ龍子夫人！　私はたゞ一寸御挨拶だけして直ぐとお暇をするつもりです、
（熱情を込めた夫人の手に接吻する）明朝まで待てといふことでしたけれど、辛抱
が出來ませんから」
夫人呆氣にとられ顏を見て居る。
龍子夫人「オゝ（涙聲で）文雄さん」

文雄「私土井文雄です。栗雄さんの教師でした」

夫人文雄を抱擁してシク／＼泣き出す。

嘉平治「これ、もう澤山だよ龍子」

輪喜子「だから貴方所、明日までお持ちなさいと云つたのにねえ」

龍子夫人「可愛い〻私の子供、栗雄！　小さくして死んだ栗雄、……栗雄、可愛かつたわが子！」

輪喜子「母様！　困つて仕舞うわ、だつてどうにもならないじやありませんか、皆な神様の思召になるんですから」

文雄（泣き乍やさしく）「ほんとに何んとも……」

龍子夫人「あの子は水に溺れましたんですわ、何故でせう。そんなことをマアどうして爲たんでせう？（聲を密め）愛子は彼方で寢て居たのだつたわ、私、つひ大きな聲を出したり騒をしたりして……でも文雄。お前はどうしてそんなに汚くなつたの、ねえそんなにお爺さんになつてしまつたの」

文雄「ハア、瀕車の中で何處かのお婆さんが「古ぼけた學生」つて私のことを云ひました」

龍子夫人「あの時分は本當に小供らしくつてそして可愛らしい學生だつたわ、さうだのに、今は、髪の毛は薄くなつてしまふし、眼鏡なんかかけてさ、あんた眞實の學生さんなの？」

文雄「ハア、僕は永遠に學生であるのです」

龍子夫人（兄に接吻し、それから輪喜子に接吻する）「さあ寢ませう。兄い樣、貴方も隨分年を老つたわ」

比須吉（夫人の后について行く）「もうお休みかな、わしも急に痛風が起つたによつて今夜は泊めて貰ひませうかな、龍子夫人、明日の朝は忘れなく――二百五十圓だけ、宜しいですか」

嘉平治「お前まだそんなことを云つて居るのか」

比須吉「二百五十圓……抵當の利子を拂うのですから」

龍子夫人「だつて私、お金なんか無いのだよ」

比須吉「そんな意地悪を云はんで、直くお返へしします。奥様、ホン僅かな金高ですから」

龍子夫人「ぢや可いわ、兄い様に出しておもらひね、兄様あげて下さいよ」

嘉平治（疲肉に）「ヨシ澤山あげるよ、かくしを擴げて待つてるが宜い」

龍子夫人「仕方が無いわね、あの人是非欲しいんでせう……直き返すでせうから」

龍子夫人。文雄。比須吉。房兵衛出て行く。嘉平治、輪喜子、彌吉殘る。

嘉平治「妹は相變らす金を捲き散らす癖が止まらないな（彌吉ニ）貴様は行つてくれ、何んだか鷄臭い様だよ」

彌吉「旦那、あなたのお極りでさあ」

嘉平治「何んだと（輪喜子に向ひ）どうしたんだい」

輪喜子（彌吉に向ひ）「お前の母様が田舍からお前に逢ひ度いつて下男部屋で待つてゐるよ」

彌吉「どうもうるさい奴だ、そんな事は頼みはしない」

輪喜子「マア何んて、親不幸の子だらふ」

彌吉「本當に用なんか無いんでさあ、明日まで待つてゐるが宜いや、馬鹿々々しい」

（出て行く）

輪喜子「母様は昔通り些つとも變はらないわ、もし好きにさせといたら、何んでも彼でも持物を皆な人にやつてお仕舞ひでせう」

嘉平治「全くだ。私つくづく考へたね。ここに一人の病人があつて、それには多くのいろ〳〵な療治法があるとするとき、その決果は病人が直らないと云ふ事になるんさ、私はいろ〳〵と療治法を考へ出したが、結局はこれを考へないと仝じことになる——所で、どこかしこの人が大きな遺産でもそれを殘して死んでくれれば宜いとか、愛子か非常な金持とでも結婚してくれるとか、でなけりや、ヤロスラフまでいつて叔母の伯爵夫人の所へ運試しに當つて碎けるか——何しろ叔母は素敵な金持なんだから」

輪喜子「神様のお助けがあればねえ(泣く)

嘉平治「お前なくのじやない、叔母は非常の金持さ、然しどうしたことか、私達を好かないのだ、第一母様か貴族でない、たゞの辯護士と結婚したのが不可ないのだよ(愛子戸口に現はれる)宜いか母様の結婚した、それだけで、よしあの人か道德的な生活を送つたにした所が申譯にならないのだよ、母様は見る通り親切に、優しい氣質の人だが、あの人の身持の疵のあることは全く隱しおほせられない、それはあの人の樣子でも分るだらふ」

輪喜子「愛ちやんが扉の所に居てよ」

嘉平治「何んだと――ヤアどうも變だぜ、左の眼に砂石でも入つたのか、よく物が見えない、この前の木曜に裁判所へ行つたときからだ」

愛子出で來る。

輪喜子「どうしたの、愛子さん、お前さん寢なかつたの」

愛子「寢ようとしても私寢られないのよ」

嘉平治「愛子か。どうした(愛子の手と頰とに接吻する)可愛いゝ愛子、お前は本當に可愛いゝ子だよ、お前は私の姪じやない私の天使(エンゼル)だ、俺の一切だ！　叔父さんと信じとくれ」

愛子「私、叔父樣を信じてますわ。そして叔父さんを誰よりも深く愛してゐますし、又尊敬してますわ、だけど、叔父さん御生ですから言葉だけは氣を附けて下さいな、今だつて何んと云つてゐらつしつたの、御自分の妹じやあないの、それをあんゐこと仰言つて」

嘉平治「いや、實にお前の云ふ通り(額を手で蔽ひ)俺は何んてえことを口走つたんだらふ。主よ。主よ。どうぞ、私を、私からお救ひ下さい。前程も戸棚に向つて演說して仕舞つた。そして爲た后で馬鹿々々しいと思つた」

愛子「ねえ、后生ですから言葉を慎み遊ばせ、何も云はない方が男らしいわ」

輪喜子「左樣よ、叔父さんがお口をもつとお慎みになれば、それこそ今よりもたんと仕合せになつてよ」

嘉平治「ヨシ、ヨシ、俺は沈默を守るよ(二人の手に接吻し)屹度沈默を守る。たゞ一つ言はんけりやあならんことがある。それは用事だからね、――えゝとこの前の木曜に私が地方裁判所へ行くと、其處で種々の談か出たが、その談の中に手形で金を借りて銀行の利子が拂へると云ふことだつたよ」

輪喜子「甘く行けば宜いけれど」

嘉平治「それで金の調達だが、私はこの次の木曜に行つてもう一遍談をして見やう、それから、母樣は魯馬吉に相談するだらうし――無論あの男は厭とは云ふまいよ それでお前達だが、ヤコー!スラフの伯爵おばさんを訪ねてやる、私達は三方から骨を折つて見よう、さうすれば、屹度この難關が切り拔けられる、それは確に私か請合ふよ(氷砂糖を舐り乍)私は私の名譽にかけて誓ふ。何んなことがあつたつて光輝ある所有地を競賣にするやうなことはせぬつもりだ」

愛子(平和にかへり)「マア、賴もしい叔父さん! 何んて賢いんでせう(輪喜子に抱き附)宜かつたわ。此で私氣か延々した、安心したわねえ、幸福ですわ」

房兵衛出で來る。

房兵衛(叱るように)「嘉平治旦那樣、一体どうなさるのでございます、何時寢床に這入らつしやるのだよ」

嘉平治「直ぐ行くよ。直ぐ行くよ。房兵衛行つてくれ、俺は一人で宜い樣に着換へるから、さあ子供達お休み! 細かい事は明日談さう。寢るとしやう。(愛子と輪喜子とに接吻して)わしは自由主義者だ! 八十年代の人間だ。世間の人達は八十年代の人と云ふと兎角惡るく言ひたがるが、俺はあの時代の人間としては可成り苦るしんで來たと思う、百姓達か俺に敬意を表するにもその原因がある――」

房兵衛「嘉平治旦那樣!」

嘉平治「ヨシ、ヨシ行くよ、愈々寢ることにする、道中でクサメガ二つ出た、私は生活改善をする(出て行く房兵衛隨ふ)

愛子「これでやつと私氣が落ちついたわ、だけど私、ヤロースラフへは行き度く無いことよ、私し大叔母樣は好かないんだもの、有り難う叔父さん!」

輪喜子「愛子さん、さあ寢ませうね。私も行くわ、で、あんたの留守に厭な事が起つたの。あんたも御存じでせう、下男部屋に英造だの盛太郎だの丁市だの輕吉ぢひさんなど、古ーい下男しか居ないんでせう。スルト皆なが見知らない破戸漢仲間を部屋へ引張り込で寢とまりさせるんでせう。スルトね、彼奴等は私しが客ほうで豆ばかり喰はして居るなんて惡口言うんでせう。私もう隨分口惜しかつたのよそんなこと英造の奴が云ひふらすてえ事解つたから、私英造を呼びつけて思ひ樣叱り飛したの(愛子を見て)愛ちやん、愛ちやん、寢てしまつたわ(愛子の手をとつて)寢床へ行きませう、さあ(愛子をつれながら)マアその人ちやんとお休みなさいよ、さあ〳〵(二人は愛子の部屋へ行く。闇の彼方羊飼が角笛を吹く)

土井舞台を通りかゝり愛子と輪喜子を見て立ち上る。

輪喜子「しッ、愛子さん寢たのよ、サア行きませうねえ」

愛子(寢呆けて)「私、本當に疲れてよ。あら鐘の音がしてよ、叔父樣！　叔父樣！　母樣！　母樣！」

輪喜子「さあ行きませう、行きませう」

輪喜子と愛子寢室に入る。

文雄(熱情を以つて)「おゝわが太陽！　おゝわが青春！

——幕——

‖第　二　幕‖

野外。古く崩れかゝつた荒廢しかけた廟、その傍に井戸、昔墓石だつたらしい大きな石、古い腰樹。彼方には邸へ通ふ路、片側にはポプラの樹立つゞく。樹立の彼方櫻畑、遙か彼方地平線に太陽輝き、日の暮れ方、家庭教師岩野。愛子。彌吉、腰掛に腰を下ろす、執事海老平その傍にギタラを彈いてゐる。一同沈思にふける。

岩野（考へ乍）「私は正式の旅行券が無いの、それには、本當の歳を知らないのよ、だから私いつまでも若いつもりでゐたのだわ、私がまだ小供であつた時分、私は本當の父様と、母様とにつれられて、ある國の市場から、ある國の市場へ渡つて、見世物を興行して居たのさ、これでも、私もサルトモルタールだの何だのと、いろいろの輕業をやつたものさ、父様と母様とが死んでから、あるドイツ人のおばあさんが、私を養女にして教育を仕込んでくれたので私大きくなるとまた家庭教師になつたのだよ、だけどね、左樣云ふわけで、私一体何處の者だか、又誰の子なんだか少しも分らないの、私の兩親てえのは正式に結婚をして居なかつたかも知れないの（かくしから胡瓜を出して噛り乍）私こん話がして見たいのだけれど誰れに話すつて親類もまるでないのだからねえ」

海老平（ギタラを彈き乍歌ふ）

ホンに煩い世間じやないか。……

仇も仲間も仝じ人よ……

マンドリンを彈くのは宜いものだね。

岩野「アラッ、マンドリンぢやなくつてよ、そればギタラじやないの（懐中鏡を出して化粧を直す）

海老平「戀に狂ふ男のために、それはマンドリンよ（歌ふ）

「乙女戀ひしの切ない思ひ、

せめてお前に通ひもしよなら
心の曇りの晴れようものを』

（彌吉一緒に歌ふ）

岩野『マア、この人達は何んで下手な歌ひ方するんでせう。狼が吠るやうだわ』

おつる（彌吉に向ひ）『外國へ行つて暮らしたなら、どんなに嬉れしいだらふね』

彌吉『こりや宜いさ、素敵に宜いね（欠呻し乍卷煙草に火をつける）

海老平『それは理の當然さ、外國では、或すべての物事が、こんな田舍とは違つて委く向上の極に達してるからねえ』

彌吉『その通り、間違ない』

海老平『僕は修養の人だよ、僕はこれまでいろいろと立派な書物を讀んだが、究極するにどうも人生が不可解だね、僕は果してこの世に生きる必要があるか、それとも一思に自殺した方が宜いのかと、内々迷つて居る、だから何時如何なる場合にも備へるために、この通り、ピストルを入れて持つて居る。ホラね（ピストルを

出して見せる）

岩野『海老平さん、お前さんはナカ〳〵利口なんだね、……そんな調子でやつたら世間の女なんぞは直ぐ夢中になつてしまふでせう、おゝ恐い、ブルブル、（行きかけて）あゝ厭になつて仕舞う。私や、いつも、誰も話相手がないんじやないか、私やいつでも一人ぼつちよ、あゝいつでも一人ぼつちさ、友達もなし、親類もなし、なぜこんな世間へ生きて居るんだか何もかも分らぬ事許りなのよ』（そろ〳〵出かける）

海老平『極めて嚴格に、そして他人に關係なしに、自己を中心として考へる時、僕は運命の力が僕を支配すること――丁度大嵐か海上の小舟を弄ぶ如く、甚だ殘酷なものだと云ふことを自覺するんです――僕の考へが違つて居ると云ふならば私は一例を引いて見やう。今朝、僕が起きて見ると、まあたとへですよ、僕の胸の上に蜘蛛がゐるじやないか、ゑ、それが實に超自然なるものでちよつとこの位あつた（兩手で大きさを示す）それから起き出てから一杯のクワスを飲まうとして杯を

とりあげたとき、そこに僕の好まぬものが入つて居た。例へば油蟲といつたように、そこで事々物々私を考へさせられます。――（おつるに向ひ）おつるさん、御迷惑だらふが、しばらくお話したいことがあるよ」

おつる「御しやいな」

海老平「いや、差し向いで話した方が宜いのだが（溜息をつく）

おつる（困つて）「それは話しをおきしても宜いわ。でもまあ、御生ですから、その以前に私の外套をとつて來て下さいな、戸棚の傍にかけてありますから、何んだか空がジメ〳〵するやうだわ」

海老平「宜しうございますよ、お嬢さん。僕行つて取つてきてあげます。サア畜生、やつとピストルの使ひ途が判明したぞ、前途多望」（ギタラをとり上げ彈き乍引つ込む）

彌吉「巫山戯て居やあがる二十二の不仕合せめ、あいつ途方もない馬鹿だな（欠呻）

おつる「マアどうしませう。あの人ピストルでやるでせうか、私この頃神經質になつて仕舞つたのだらふか、始終慄へがくるのよ、私初めてお屋敷へつれて來られた時はカラ子供だつたの、それが今は、並百姓家なんかに向かなくなつてしまつてね、手だつて御覽なさいこんな眞白で、まるで貴婦人のやうでせう。私この頃、スッカリきしやになつて、何を見ても怖くなるのよ、だから彌吉さん、ヒョットしてあんたが欺すやうなことでもあれば私の神經がどうなるか分らなくつてよ、宜くつて？」

彌吉（接吻して）「おゝ可愛いゝつる子！　なあ女てゐものは身持の正しいのが第一だよ、俺等、何が嫌いだつて、身持の惡い娘位嫌いなのはないんだからな」

おつる「私、もう死ぬ程お前さんを愛してゐるんだよ、お前さんはそれは敎育はあるし何んの話でも出事るんだからね」

彌吉（欠呻し乍）「左樣かな、俺から考へると斯うだ、娘が誰れかに惚れたと云ふ、それでもうあの娘の不品行と云ふことを現はすのだ。――野天でシガアを吹かすのは實に宜い氣持だ（耳を立てて）誰か來たやうだな、奥樣と外の連中だぞ――（お

つる慌てゝ男に抱きつく）おつるさん、水を浴びて出て來たやうにして家の方へ行きな、こつちの道から行くんだぞ、それでないと皆に出逢う、左樣すれば俺ところで逢引でもした樣だからな、俺はそんなことを思はれるのは厭だからな」

おつる（そつと咳をして）「お前さんの煙草で咳をしてよ」

おつる彼方に行く。彌吉廟の傍に掛たまゝで居る。其處へ夫人、嘉平治、魯馬吉出て來る。

魯馬吉「幾度も云ふやうですが、此處等で明瞭、お考へを極めないといけませんせ、歳月は人を待たづと云ひ升からねゑ、問題は極めて簡單です――二つの内一つを選べば宜いので、卽ちこの土地を別莊地に貸すか、貸さないか、答は一言しかないのですよ」

龍子夫人「誰だへ、いやな葉卷をここで吸つてゐるのは」

嘉平治「鉄道が敷けてから、實に便利になつたなあ（掛け乍）一寸町まで晝食を整へに行つてもう歸つて來られるんだからな……エヽト眞中が紅だ、家へ歸つて一ゲームせんければならん」

龍子夫人「そんなに急がなくとも宜いわ」

魯馬吉「ホンの一言――爲るとか爲ぬとか――どうか御返事をお願ひします」

嘉平治（欠呻をして）「何だね」

龍子夫人（金入をのぞいて）「オヤオヤ、昨日は可成りお金があつたんだけれど、もう大抵ありやしないわ、可哀想に輪喜子が經濟廻しを甘くやるつもりで、皆なに牛乳のスープを飲ましてくれて、台所の年寄達には豆許り食べさせて居たつて、駄目だわ、何んしろ私が斯うバッパと無くしてしまうんだから……（金入を落す金貨こぼれる）まあ、私皆落して仕舞つてよ」

彌吉「奥樣失禮ですが、私が拾ひ升から（金貨を拾ひ集める）」

龍子夫人「マア彌吉かい、後生だから拾つてお呉れ、私何んだつて町へなんか中食を食べに行つたんだらふ、厭になつて仕舞つてよ、私お前さんの行きつけだと云ふあの風琴のある料理屋は厭ひよ、考へて御覽、卓子掛けと云へば皆なスープの臭

ひがするし、兄い様はどうしてあんなにお酒が上れるの、そしてどうしてあんなに澤山食べられるんでせう。それはマア宜いとして、あんたあんな料理屋でペラ〳〵と辯舌るんですもの、ヤア八十年代だの、デカタンだのつて、突拍子もない話を初めるんですもの、それも相手によりけりでせう、給仕なんかにデカタンの話なんか始めるんですもの』

魯馬吉『全くですよ』

嘉平治（身振をして）『それは分つて居るが、僻じや、俺は直らんよ（苛々し乍）貴樣、何んだつて、何んの用があつておれの前を左樣煩く歩るく』

彌吉（笑ひ乍）『私は旦那のお聲を聽くと笑はずには居られませんアハ、、』

嘉平治（夫人に向ひ）『失敬な、龍子。彼奴を出すか、それとも私が出るか』

龍子夫人『彌吉、彼方へお出でよ、駈け出してさ』

彌吉（金入を夫人に渡し）『へイ、直ぐまゐります。早速まゐりますあ（出て行く）

魯馬吉『御承知の百萬長者照田家でこちらの所有地を買ひたがつて居りましたが、競賣の日には自分でやつてくるさうです』

龍子夫人『それをどうしてお聽き』

魯馬吉『町で專らその噂をして居りました』

嘉平治『ヤロースラウの叔母さんからこの際送金してくれる約束になつてゐるが、それがいつだか、また其の金額の程もわからない』

魯馬吉『どの位送つて下さるでせう。十万圓か、それとも二十万圓も』

龍子夫人『マア、どうして……精々一万圓か一万五千圓位よ……送つてくれるにしても』

魯馬吉『斯んなことを申しては誠に失禮でございますが、實際私、生れて以來貴方達二人のやうな呑氣に、そして實務にうとい方たちに逢つたことはございません、私は分りやすいロシヤ語で、貴方達の所有地が賣られかけてゐますぜと申し上げて居るのに貴方達の耳にはお通じにならないんですからな』

龍子夫人『ですけれど、私達はどうすれば宜いんでせう。又私達にどうしろと仰言の

か、それをお言ひなさい」

魯馬吉『恐れ入ります。私は毎日申上げてゐるじやございませんか、毎日毎日、一つことを繰り返へし〳〵申し上げて居るんですよ、櫻の畑とその他の地所を別莊地に貸し出すのです。それも直ぐ、直ちにやらなければ駄目です。何しろ競賣てに奴が二月の間に迫つてゐるんです。宜しいかな。お分りになりましたか、貴方達は今纏つた金がなければならい、それで賣ると云ふ決心がつけば、直ぐとお金が出來て、貴方達は救はれる』

龍子夫人『だつて別莊地の別莊だの、もうそんな下等のものはねね』

嘉平治『龍子お前の云ふ通りだ』

魯馬吉『私はいつそ泣き出したくなりました。私もう辛抱が出來なくなりました、お〻私は卒倒しさうになつて來ました。ホントに貴方達は私の命取りです（嘉平治に）あなたは宛でお婆さまですよ』

嘉平治『何んだと』

魯馬吉『あなた、ばあ樣ですよ（行きかける）糞可愛かりの婆樣！』

龍子夫人（ビックリして）『いゝね、行つてはなりません、どうぞ此處に居て下さい、後生ですから、そして何とか方法を考へませう』

魯馬吉『考へて見た所が何に成りますか』

龍子夫人『どうぞ行かずに居て下さいな。貴方が居ないと私困るんですから、兎に角お前さんに居て貰うと、何んだか氣丈夫に思へるのですから、私もう始終何んだか家が耳のはたで顚倒でもするやうな氣がしてゐるんですよ』

嘉平治（氣を取られたように）『エゝト隅でクヨンを離れて、それから眞中で二度突きか』

龍子夫人『私達は罪が深いんでせう。その罪を滅すためにこうして苦勞をしなければならないのでう』

魯馬吉『貴方達がですつて……して貴女はどう云ふ罪を犯しました』

嘉平治（氷砂糖を舐り乍）『世間では私が氷砂糖で全財產を舐り潰したつて申して居る

さうじや、アハ、、、(笑ふ)

龍子夫人「マア澤山の罪を私は犯しましたのよ、……結婚した夫と云ふのは借金の外には何にも爲なかつた人だつたの、その人シャンパンを飲み過ぎて死んだ位でね それは大變な大酒飲でしたわ、で、私外の男と戀をして一緒に駈落したんですわ すると間もなく——最初に下された天罰でせう——ちようどその河ですよ、私の小さい子供が水に溺れて死んだのです、私はもう決して二度と歸つて來ないつもりで、もう二度とこの河を見ないつもりで、外國へ逃げ出したのさ——私もう目をふさいで狂人のやうに駈け出したの、スルト男も用捨もなく後からついて來るの、途中メントナで男が病氣になつたの、私其處へ別莊を買つて、さう三年と云ふもの病氣のために惱まされて精も根も盡きてしまつたの。

そのうちに去年いよ〳〵借金のためにその別莊も賣らなければならないので、それを賣つて私は巴里へ行つたのさ、スルト何處までもその男がやつてきて、洗ひざらひいすぶつて持つて行つた揚句の果、私をすて〻外の女と逃げてしまつたら

ふじやないか、私もう死んじまはうと毒藥を飲みかけたことも有つたの——もう馬鹿げきつてお恥しい話なんですけれど事實其樣なのですよ——それから又氣が變はつてロシャへ歸る氣になつたの、自分の故郷へ還つて娘と一緒に暮したくなつたのですわ(涙を拭ふ)

神さま! 神さま! どうかお憐み下さいませ、そして私の罪をお許るし下さいませ(かくしから電報を取り出し)これは今日パリーから來たの、その男が不始末をわびるから、も一度歸つて來てくれと云つて來たんだよ(電報を引き裂いて)ざや、音樂が聽こるやうだわ(耳をそば立てる音樂の響遙に)

嘉平治「あれが評判のユダヤの樂隊だよ、覺こて居るかい、ホラ四挺ヴアイオリンに笛にダブルバスの」

龍子夫人「マア、彼れがまたあるの、何時か呼んで見ませう、そして舞踏會をしませう」

魯馬吉(耳を立てゝ)「私、何にも聞こないが(小聲で)

『恐ろしや、恐ろしゼルマニー
金の爲なら、お金の爲なら
ロシヤをフランスのやうに
してしまふ、してしまふ。』
(笑ひ乍)昨夜はどうも面白い芝居を見ましたよ、芝居見に行つてね』
龍子夫人『馬鹿らしい。貴方たちはわざ〳〵芝居見に行くには當らないわ、それより
は御自分の芝居を見るがいゝわ、どんなに退屈の生活を送つて居るか、又どんな
餘計なおしやべりして居るか、その方が餘程芝居だわ』
魯馬吉『全くその通り、正直の事を申し上げますと、私共の生活は可成りつまらん生
活です。——私の親父は馬鹿の百姓でした。農夫に學問なんか要らんと云ふ、一
流の理屈を振りかざして私に何も敎へてくれなかつた。親父が私にしてくれた事
といつたら、それは棒で私をブン毆る位の事でした。で恥しいがこうした馬鹿で
緑でなしになつてしまつたのです。ですからもう大變な惡筆で人さまの前には恥

しがつて出せません。トント豚ですな』
龍子夫人『お前さんは結婚しなけりやあ駄目ですよ』
魯馬吉『左樣です、全くです』
龍子夫人『何故、輪喜子を貰つてやらないの、あの子はいゝ子だがねゑ』
魯馬吉『さうです』
龍子夫人『あの子は本當に正直ないゝ子ですよ、もう一日働きづめだからね、働の爲
に世の中へ出たと云つても宜いのよ。それに何より大切のことは、あの子はお前
さんを愛して居る、お前さんもあの人が好きだつたじやないの』
嘉平治『私は或人から銀行に入らないかと勸められてゐる、年に六千圓出すさうで、
わゝどうしたもんだらふ』
龍子夫人『お前さん銀行へ入るの……マア斯うして居る方が安全よ』
房兵衛オーバコートを抱えて出で來り。
房兵衛(嘉平治に)『旦那樣、それをお召しなさいませ、大分雨つぽくなつてまゐりま

した』

嘉平治（外套を着乍）『煩い奴だな』

房兵衛『本當に仕樣がないよ、何も仰しやらないで、フイと出てお了ひになるんだから……』

龍子夫人『房兵衛や、お前幾年におなりたい』

房兵衛『御免下さいませ』

魯馬吉『オイオイ冗談じやない。奥樣はお前がいくつになつたとおきゝなさるんだ』

房兵衛『私はもう久しく生きて居るんで、左樣私がまだ女房を持つてゐた頃、貴女樣のお父樣も、まだ生れさつしやらなかつたからねアハゝ、その内に農奴解放になつた頃、私は下男頭だつたので、解放なんか爲て貰はんでも宜えと思つて、このまゝ此家に御奉公して居ましたが、——あの時は誰も彼も嬉れしさうだつたが何故そんなに嬉しかつたのか、その仲間にも分らなかつたのでな』

魯馬吉『フム、その事は宜かつたよ、とにかく俺等は鞭で追ひつかはれてゐたんだから

らな』

房兵衛（聞き違へ）『私も左樣思う、この前百姓は御主人を大事にするだし、御主人は小前百姓をかばうといふ風だつたからな。だが今日はカラ駄目だ頭も尻尾も分らねゐカラ無茶だ』

嘉平治『もう止せッ房兵衛、俺は明日町へ行かねばならん。——手形で金を借りるつもりだ』

魯馬吉『マア駄目ですな、馬鹿らしい恐らくは利子だけも拂ふことは出來ますまい、そんなことでヤキモキなさるのは白痴（コケ）の骨頂でさあ』

龍子夫人（魯馬吉に）『出鱈目を云つて居るんだわ』

文雄。愛子。輪喜子出で來る。

嘉平治『一同遣つて來たな』

愛子『オヤ母樣、こちらにいらつしやつたの』

龍子夫人（やさしく）『お出で、お出で……皆なよく來たわねに——（愛子と輪喜子と

を抱へ）マア私どんなに二人が可愛いゝのだらふね、サア私の傍へ來てお座り」

皆々座はる。

魯馬吉『永遠の大學生君。君はいつもお孃さんたちの仲間だね』

文雄『君の關したことでは無い』

魯馬吉『君はかれこれ四十だらふが、何かいまだ依然として學生かね』

文雄『フム、止せよそんな卑劣な冗談は』

魯馬吉『アハ、、努つたのかい、ムキに爲つて馬鹿らしい』

文雄『どう云ふわけで君は僕につきかゝる』

魯馬吉（笑つて）『アハ、、おやあ一番君が僕に對する御意見を伺ひ度いね』

文雄『聽きたければ云ふさ、僕の意見は斯うだ、君は金滿家だ、もう程なく百萬長者となるであらふ——苟くも道に當るものは何んでもとつて食つてしまう食慾なる食肉獸が、新陳代謝の爲に必要なる如く君にも必要があらふ』

輪喜子『土井、そんな話でなく星の話をして下さいよ』

龍子夫人『昨日の話のつゞきをしませう』

文雄『何んでしたつけ』

嘉平治『高慢なる人間の話さ』

文雄『僕達は昨日隨分長いおしやべりをしましたが、つまり結論に逢はずに終はつてしまつたのでしたな。あなたのお說によると、高慢なる人間と云ふものは何かしら神祕な所も有りさうですね、……然し虛心平氣に觀察するとき、其處には高慢になれる餘地があるでせうか、人間は生物的の觀察点からして、いかにも哀れむべく造られたもので、精神方面から云ふも、吾々人類の大多數は甚だ粗野で、そしてどん底まで不幸であるとしたら、それに何んの意義が有るでせうか。吾々は自身に對する自惚を捨てなければならない、唯爲すべきことはたゞ眞に勞働することのみです』

嘉平治『どちらにしても吾々死ぬのだよ』

文雄『世の中の誰にその眞理が分りませうか、また死ぬと云ふことが全体何を意味す

るでせうか。人間には一百幾箇の感覺があります。そして死ぬと云ふことはただその感覺中の五官能だけが人間と一緒に滅亡するのであつて、殘りの九十幾つかの感覺は生き殘つて居ると解してよいかと思ひます」

龍子夫人『マア、土井、お前何んて賢いことを云ふのでせう」

魯馬吉（皮肉に）「いやはや素張らしい事を云ふ』

文雄『人類は精神的眞理を發見するために、最善な考究を要すべきであらふと思ふ。そして吾々は働かなけりやならない。吾々は金力を擧げて眞理を求むる篤學者を助けなければならない。今日では極く小數の人間――かゝロシヤでは働いて居ない僕の知つて居る多數の教育ある人物は、何にも研究しなければ、何にも有意義にしてをらない。まるで働く能力が無いやうです。彼等自らは稱してインデリゲンチャ（有識階級）と云つて居る。そして彼等は召使に對しては『貴樣』と呼び捨てにする　百姓達に對しては動物扱ひにしてゐます。何にも研究するでもなし、眞面目な本を讀むでもない。絶對に何にもしない。たゞ藝術について少し計り、又、全然無理解である。そして重大問題と稱して空想を議論し合つてゐる、知つた振をして哲理を說いてゐる。そして我々の大多數、九十九パーセントまでは野蠻人のやうな生活をせねばならないのです。

憬境は人を低下して、この結果極く些々たる事で罵り合う。毆り合う。野獸のやうに飲食し、塵埃と不潔なる空氣の中に眠る。――到る所には蟲がわいてゐる。いやな嗅ひがする。じめじめした自然の中には、有ゆる道德上の墮落が行はれる。そして我々のあるものが聰明らしい議論を口にするが、それはたゞ吾々自身の良心を欺き、他人の注意を他に轉する手段に過ぎない。一体、彼等が理想とし、議論とする養育院がどこにありますか、通俗圖書館がどこにあります。そんなものは、たゞ小說の中に書かれて居る丈けで、それは徒に餓ゑて居る人に食慾を催さしむると仝じです。僕はあの僞せ者の嚴肅ぶつた顏を恐れます。厭な氣持がします。嚴肅らしい會話を恐れます。吾々は寧ろ沈默を守ればよい、ア、沈默なるかな』

魯馬吉「所でです。私は定まつて毎朝五時に起きますよ、そして起るから寢るまで働きます。私は商賣上で始終自分の金やら他人の金を取引しますが、それには多くの人間がぐるりに居ります、ヘエ、人間が何か仕事を始めて御覽なさい、スルトいかにこの世の中には正直に、禮儀のある人間が少いかと云ふことが分りますよ時々私は寢床の中で眼をさましながら考へることがあります。その時はいつも、おゝ神樣、神樣、あなたは吾々に大きな自然を與へて下さいました、大きな野原と、廣い森林と、それから測ることの出來ない地平線とを與へて下さいました。さうであるならば、その大なる自然の中に生きて居る吾々も又實際に大男でなければなりますまいとねえ」

龍子夫人「アラ、貴方大男になりたいんですつて、それはお伽話ならば結構ですけれど、實際の生活では怖がられる計りだわ」

海老平がギタラを彈き乍後ろを通り過ぎる。

龍子夫人「海老平が通るわ」

愛子「本當に海老平が通ることよ」

嘉平治「陽が沒した」

文雄「左樣ですな」

嘉平治（空言をする樣に）「おゝ自然よ、驚くべき自然よ、御身は永遠の光輝を帶びて燃えて居る！　おゝ美しきものよ！　この世に超越せるものよ、我々から大なる母と呼ぶおん身は、生と死とを一身にあつめて、時としては生を與へ、時としてはそれを亡ぼす……

自然が人生に對して眞理を敎ゆる！

輪喜子
愛子「おぢさま！」

文雄「貴方は、矢張り眞中の宅へ、赤玉と二つやつて居られる方が宜いですよ」

嘉平治「もう默るよ、沈默するよ」

皆物思はし氣に座はつて居る。

不圖遙かの彼方に綱が切れて空から落ちた樣な音が響く。

龍子夫人「何んでせうか」
輪馬吉「サア分りませんな、多分遠方の石炭坑で採掘桶でも落したんでせうかな」
嘉平治「イヤ左樣でない鳥だよ、鷲か何んぞ」
文雄「でなけりやあ梟かな」
龍子夫人（震へ乍）「何んだか氣味が惡いのねね」
房兵衛「大災厄の前にはこんな知らせかありましたよ、梟が鳴いたり……サモワルガだ切つたりしてね」
嘉平治「何が大災厄だい」
房兵衛「農奴解放でさあ」
龍子夫人「サア皆さん、家へ這入りませう。スッカリ暮れてしまひましたよ（愛子に）オヤお前お泣きなの、どうお爲だい、ね、ね（彼女を抱く）
ポロ〳〵の白いフラーヅカを冠つた長い上着をきた浮浪者が少し醉つて出て來る。
浮浪者「ヘエ、御免なせね、この道を眞直ぐ行くと停車場の方へ出られますかな」

嘉平治「さうだ、それを行けば宜しい」
浮浪者「どうもお世話樣でございます。エヘン（咳拂ひをする）結構なお天氣で、
（朗誦）「兄弟よ、わが惱める兄弟よ……お前はオルガ河のほとりに出でよ。呻くものは、ア、誰れぞ」
（輪喜子に）「お孃さまへ、どうかお腹のペコペコになつてる同胞へ、銀貨を一つやつて下さい」
（輪喜子ビックリして叫び聲をあげる）
魯馬吉（怒つた聲で）「コラ、失敬な事をするなッ！」
龍子夫人「サア、上げませう。（金入の中を探す）オヤ銀貨が無いわ……いゝや、これは金貨だけど、持つてお出で！」
浮浪者「奥樣、どうも有り難うございます」
浮浪者去る。
輪嘉子（慓へて）「私行くわ、行くわ、……母樣。家では召使達に食べさせるものが無

いのよ、それだのにあんな男に金貨をお遣りなさるなんて」

龍子夫人「私、本當に馬鹿ね。でも持病なんだから勘忍して下さい。家へ歸つたら私、持つてる丈皆な上げるよ。魯馬吉さん、私にまだ少しお金を貸して下さいなね」

魯馬吉「ねゝよござんすとも」

龍子夫人「サア、皆な行きませう。輪喜子私達はもう悉皆お前さんの結婚を極めたのだよ。お目出度う」

輪喜子（涙聲で）「母様冗談だわ」

魯馬吉「尼寺へ行きやはるか」

嘉平治「私は暫らく玉突をやらんもんだによつてどうも両手がブル〳〵慄へるわ」

魯馬吉「輪喜子さん。私のことも――祈りそへて下され」

龍子夫人「もうソロ〳〵夕飯よ」

輪喜子「私。あの男のためにおどかされてしまつて心臓がこんなにドキ〳〵するわ」

魯馬吉「櫻の畑の方は八月二十二日に賣られると云ふことを覺ゑて居て下さい。お忘れなく、どうか確りと……」

文雄と愛子との外皆去る。

愛子（笑つて）「おゝ私。あの宿無し樣に感謝してよ、だつて輪喜さんをおどして呉れてさ、私達二人つ切りに爲れましたわ」

文雄「輪喜さんは私達が斯うして居る中、お互に戀し合つては不可ないと思つて居るんですね、乾度左樣です。毎日些つとも二人切りにして置いて呉れんのですから多分あの人の考へでは、私達が戀愛以上に思想の超越して居ることが分らないんです。愛子さん輪喜子さんは我々が有ゆる世の空虛から、あらゆる自由幸福にすることを妨げることから超越するのが、僕達の生活の全意義で、又全目的であると云ふことを知らないのです。ねえ、進みませう。吾々は遙かな、遙かなる前途に輝ける光明を目ざして進みませう。まつしくらに進みませう」

愛子（手を握りしめ）「おゝ何んと云ふ美しい理想でせう――今日はこゝらの景色が夢

のやうに美しいのね」

文雄「さうです、申分無い幸福の天氣です」

愛子「文雄さん。私何うしたんでせう。先の樣に櫻の畑の愛着が薄らいで來たのです
よ、……以前はそれが懐しく、もう世界中何處へ行つたつて、家の畑位の處は無
い樣に思つて居りましたのにねね……變ですわ」

文雄「愛子さん！　全くロシヤが吾々二人の國です。地球には大きく美しく、それは
驚くやうな場所が有ります――ねね愛子さんよく考へて下さい。貴所のお祖父さ
ん曾祖父さん、その祖先の方々は皆な農奴の所有者でした。生きた靈魂の持主で
した。人間のこうした精靈共が、櫻の畑の一本一本の梢から――一枚一枚の葉末
から――莖から、根から、貴女を見詰めては居ないでせうか。人間の呪の聲が聽
えはしないでせうか。
あゝ恐ろしいことだ。私は沈思するとき、疑視する場合、その園は、畑は、私達
をいつも脅かします。晩方から夜、その中を歩るいて居るとき、樹のかげがボン

ヤリ佇んで居る。――丁度苦るしい、壓へられた夢の中に、百年、二百年前に起
つた一切の事の幻影を見護つて居る樣な氣がします。あゝ吾々はまだ、何事にも
成就しないのです。吾々は如何にして過去と同化するかの考へも決定して居ない
のです。我々は空漠なる哲理を語つてゐる。退屈をどうして散じやうとして居る
唯ウォッカを飲む丈けです。吾々は現在に生きて行くために、有ゆる統ての過去
を匡正し、統てを終結して仕舞はねばならないのです。しかも吾々が過去を償ふ
ためには、ただ苦難に依る外はない、不斷不屈の勞力による外はないのです。分
りましたか」

愛子「私の住んでゐるこの家はもうどうから私の家ではなくなつて居るのよ、私、行
きますとも、きつと行きますとも」

文雄「あなたがお室の鍵を持つておいでなら、それを井戸へ抛り込んでおしまひなさ
い。そして出て行くのです、自由に……風のやうに自由に」

愛子（感激して）「何んて美しい言葉でせう」

文雄「私の言葉を信じて下さい。愛子、私の云ふ事を信じておくれ、私はまだ三十になりません。僕はまだ若いんです。まだ學生です、けれどどんなにいろ〳〵世の中を通つて來たでせう。

ア、僕は冬のやうに空腹です。僕はもう苦勞性になつてしまつて、そして乞食の樣に貧乏です、運命が僕を散々に弄んだ。しかし斯うした運命の飜弄に逢つて所定めず住つて見ました、到る所に……。然し何處へ行つて居ても、どんなに弄ばされても、夜も晝も、一分一秒、僕の靈魂は不思議な豫感にふれて居ました、愛子僕は幸福の到來を感じてゐます。それに近づくことが分る」

愛子（物思はしげに）「月が上りましたわ」

海老平がまたギタラで哀調を奏でて居るのが聞ゐる、月がだん〳〵に上る。並木の向うで輪喜子が「愛ちやん何處」と呼ぶ聲がきこえる。

文雄「月が上りました。ほらあの通り冲天に……僕等の方へだん〳〵近づいて來る——

——おゝだん〳〵近づいて來る。あれが幸福です。僕には幸福の足音がきこゐます」

輪喜子「愛子さん、何處？」

文雄「又輪喜子が來た（憤つた聲で）實に厄介だな」

愛子「宜いことよ、私達は河の方へ下りて行きませう。彼處はそれは宜くつてよ」

文推「行きませう」

愛子と文雄と共に去る。

輪喜子（外で）「愛ちやん！　愛ちやん!!」

——幕——

‖第三幕‖

居間。アーチで奥の大きな客間との間が仕切られて居る。技燭架には火がついてゐる。ユダヤ音樂隊の奏樂が爲て居る。客間で大圓舞踏をして居る。男女一組づゝ行進。第一の組は比須吉と岩野。第二は文雄と龍子夫人。第三は愛子と郵便局員。第四は輪喜子と驛長。輪喜子は踊り乍泣いて居る。最後の組におつる――皆々居間を舞踏の歩調で通つて行く。

比須吉「グラン・ロン・バランセ(歩調法)……レ・ガヴァリエール・ア・ジュヌー・エ・ルメルシエー・ヴォーダム(騎士達よ跪げ、そして貴女達に謝意を表せ)

房兵衛夜會服、炭酸水を盆にのせ、舞台の上に運んで行く。比須吉と岩野とは居間に入つてくる。

比須吉「私は多血質じや、これまで二度も卒中を起しかけた、だから舞踏は骨が折れる――だが私は馬の樣に丈夫で、そして駈けられる私の親父は冗談が好きでね、家の系圖についていつか斯んなことを云つたよ、私の清水家の先祖はカリグラ帝が元老院の議官にしたと云ふ、その馬の後裔だと云ふのさ……(掛けながら)だがその中で尤も惡い事と云ふのは私は金の無い事だ、――腹の空いた犬は肉以外に何ものもこの世にある事を知らないからね、(鼾をかく、すぐ目をさます)私も丁度それだ――もう何んと云つてもこの世の中は金、黄金だね、黄金以外には何もない」

文雄「成程、さう云はれて見ると君の体のこなしが何處か馬に似とる所がある」

比須吉「ウム、馬と云ふ奴は可愛いゝ獸だよ、――それに第一馬は賣物になるからな」

隣の室で玉を突く音がする。輪喜子、アーチの向うの客間に姿を現す。

文雄(からかひて)「魯馬吉君の奥樣、魯馬吉君の奥樣」

輪喜子(憤つて)「徹くさい紳士!」

文雄「左樣、僕は甘んじて徹くさい紳士となる、それを誇りとして」

輪喜子（悲しげに）「あんな樂隊なんか呼んで、一体どこに拂ふお金があるんだらふ」

文雄（比須吉に）「君が一生涯の間、借金の利子を拂ふ金の五面に徒費した精力を何か外の方面に向けてゐたら……十分世界をひつくり返へす樣な大きな仕事が出來てゐたらふと思う」

比須吉「それそれ、哲學者のニーチエガ――室に偉い、かの巨人の樣な智力を持つた私の崇敬する人だが、その人の著述の中で――紙幣を贋造することは極めて正當なことだと云つて居る」

文雄「はう。君はニーチエと讀んだのかね」

比須吉「何、家の忰が云つたのさ、所で私は今十錢でも贋造しない位酷い破目になつて居る。私は明後日、三百十圓拂はんければならん、百三十圓丈けは出來ては居るが（かくしを探つて驚愕する）おや金がない、私は金を失くした。（泣き乍）金を金を……（ニコ〳〵して）有つたぞ有つたぞ、アハ……裏かくしに入つてゐた、イヤハヤ、すつかり汗をかゝされてしまつた」

夫人と岩野とが入つてくる。

龍子夫人（レズギンカ（コーカサスの舞踏曲）を口の中に吟じ乍）「どうして兄樣は遲いのだらふ、町で何を爲て居るかしら（おつるに）おつるや、樂隊さんにお茶をお上りとさうお云ひ」

文雄「どうも競賣が甘く行かないのでは無いのでせうか」

龍子夫人「間の惡いときに樂隊が來たもんだね。今日のやうな日に競賣を初めるのも馬鹿氣てゐたね……まあ〳〵爲方が無い」

座はつて歌を唄つて居る。

岩野（比須吉に骨牌を一組渡し）「さあここに一組の骨牌があります、その内のどれか一枚を嗚へて下さい」

比須吉「宜しい、ハイ考へました」

岩野「では骨牌を切つて下さい。それで宜しい。サア、それを下さい、敬愛すべき伸士比須吉氏、一――二――三――さあ御覽なさい、骨牌は貴方の脇のかくしにあ

ります』

比須吉（脇のかくしから骨牌を出し）『スペートハ。甘く當つた。實に妙だ！』

岩野（掌に骨牌の一組をのせ）『も一度別の事をやつて見ませう、上の骨牌は何です』

文雄『スペードの女王だ』

岩野『宜ろしい。（比須吉に）では此度の上の骨牌は』

魯馬吉『ハートの一』

岩野『宜しい。（掌を打つ。骨牌消ゆ）今日は何んと云ふ結構なお天氣でせう』

不思議な女の聲が床の下からきこえる――え、え、本當によいお天氣で御座い升：

と――と。

岩野『あなたは本當に私の美の理想でいらつしやる』

聲　『わたくしもあなたを、たいしやうおうちくちう存じます』

驛長（喝采して）『甘い。實に甘い』

比須吉（びつくらして）『實に魔法つかひの岩野。私は首つたけ貴方に惚れました』

岩野『惚れたつて！　お前さん、まだ戀が出來るつもりなの……おゝ善き人よ、さゝど惡しき娯樂よ』

文雄（比須吉の肩をたゝいて）『おい、ぢゞい馬め』

岩野『東西、東西、もう一回お目に掛けます（椅子からショールをとつて）これなる肩掛がここに御座います。誠に美しいショールがございます、誠に立派なるショールでございます。私は今このショールを賣りたいと存じますが、どなたか買手はございませんか』

比須吉（びつくらして）『どうもはや』

岩野『アイン（一）　ツワイ（二）　ドライ（三）

手早く肩掛を上げると、その陰に愛子が立つて居る。挨拶をして、母親の所へ行き接吻する。それから客間へ人々盛んな喝采の中におどり込む。

龍子夫人『おゝ上手。上手』

岩野『も一遍、アイン。ツワイ。ドライ』

ショールを揚げるとその陰に輪喜子が立つて挨拶する。

比須吉（びつくらして）「實にどうも驚いた」

岩野「これでお仕舞ひ……」

肩掛を比須吉に投げ掛け挨拶して客間へ行く。

比須吉（追ひかけて）「これはどうも亂暴千万……驚いた」

龍子夫人「まだ、兄様は音沙汰がないわ。どうして、そんなに町で愚圖々々して居るんでせう。私には少しもわからない。何ぼ何んだつて濟んでしまつたらうにね、財産の賣却がすんだとか、競賣がいけないとか……一体、どうしたと云ふんでせう。そして人を無暗に待たせて置いてさ、人の氣を知らないのだね……」

輪喜子（母をなぐさめようとして）「屹度叔父さまがお買ひになつたのよ」

文雄（冷笑するやうに）「勿論さうでせう」

輪喜子「大おば様が叔父様に代理を委任して、御自分のお名前を出さないで、抵當を買りかへるやうになつたのだわ。ねえ、皆な愛子さんのために……私屹度天の恵みで叔父様がお買ひ取りになられたらふと思ひますの」

龍子夫人「ヤロースラフの大おば様はね。御自分の名儀で所有地を買うやうにつて一萬五千圓送つてよこしなすつたのよ。——つまり私達に信用が無いのよ——けれどそれ丈けのお金では利子にも足りないんだから（兩手で顔を蔽つて）私の運命も愈々今日極まるの、私の運命がねえ」

文雄（輪喜子をからかつて）「魯馬吉君夫人」

輪喜子（憤つて）「永遠の大學生め、二度も大學を落第したくせに」

龍子夫人「輪喜子や、お前さんどうしてそんなに腹を立てるの。あの人冗談に云つてるのだわ。えゝ宜いじやないか、ねえお前さへよければ、魯馬吉さんと結婚できるでせう。あの方はそれは立派な面白い人ですよ、尤もお前が厭ならそれは仕方はないが……ね無理じひするのぢやないけれど」

輪喜子「母様、正直を云ひますと、ね、まじめに考へるのですわ。あの人は立派な人だし、元來私好いて居るんですけれど——」

龍子夫人「では結婚したら宜いじやないの。私どうしてお前が愚圖々々して居るか分らないの」

輪喜子「でも母様！　私自分でそれを申し込むこと出來ませんもの、さうでせう。二年の間、あの人のことを世間で私に言うんですもの、けれどあの人、それについて冗談一つ言ひはしませんでした。私にはよく分つてをりますわ、あの方お金を儲けることが忙はしくつて、とても私の事なんか考へてゐられないんです、私もし少しのお金があつたら、何もかもうつちやつてしまつて、尼寺へ行つてしまひますわ」

文雄「御殊勝なことですな」

輪喜子（學生なんてものは譯が分つてほしいものね。（一層やさしい聲で泣き乍）土井あんた何んて見つともなくなつたのでせう。ねゝ何んてお爺さんになつたのでせう（夫人に）母様。私、一日中何かしら爲なければ生きてゐられないのよ、もう一日中、一分間でも何か爲ずには居られないのよ」

彌吉出で來る。

彌吉（笑ひを忍んで）「海老平が玉突の棒を折りました（去る）

輪喜子「マア海老平がそんなことして、誰があの男に玉を突いてもいゝと云つたのだい。あの人達は一体どんな了見なんでせうか」

龍子夫人「土井、あの娘をおからかひでないよ、あの娘は今迄隨分と不仕合せだつたのだから」

文雄「あの人も遣り手過ぎますよ、他人の事にまで干渉して騒ぎまわらないと宜いんですけれど、この夏中、あの人は僕にも愛子にもまるで平和を與へてくれないんですもの、あの人は僕たちの間に何かローマンスでも持上りはしないかつて心配して居るのです。さうでせう何もあの人にかゝはつたことがあるじやなし、僕はそんな平凡の眞似なんかしやあしませんや、僕達は戀愛以上に超越してゐるんです」

龍子夫人「では私達屹度戀愛以下なのね、（不安をあらはし）どうして兄い様は來ない

んでせう。あの畑が賣れたか賣れないか知りたいのにね、どう考へて宜いか分らない程なのよ、私、本當にぼんやりしてしまつたの、私いつそこの苦みを忘れるために馬鹿騒ぎでもしたい位よ、ね文雄。どうか私を救つておくれ。ね、何か私に云つてお呉れ、何か言つて」

文雄「土地が賣れても、賣られなくても、それは栓じつめれば仝じことになるのですそれについてはもう久しい以前、萬事終つてゐるのですから今更何んと思つてもとりかへしはつかないのです。おゝ道には草が生にすぎて居ます。龍子夫人、落付いて、そして過去を思ひ、未來を考へねばなりませんぞ、今更になつて、あなたは、あなた自身を欺いてはなりません。この際統てを思ひ切つて、眞實に、眞實に談ひ合うのです」

龍子夫人「あゝ貴方には眞實が何、不眞實が何だか、お見にになるかもしれませんが私はもう物を見る力を失つてしまひました。私には今何にも見にないのです。貴方は何んでも重大な問題をせつせと自分で片附けてお仕舞ひのやうだが、それは年が若い故じやないでせうか。まだ本當に苦心した自己の問題にぶつつかつた經驗がないからぢやないかしら、あなたは前途を〳〵と大膽に前へ前へと見ていでだけれど、それはつまりあなたが物を見ないから、前途に怖いものを見ないからではないでせうか。人生がまだ若いあなたの眼からかくれて居るんぢやないかしら。

あなたは私達よりも大膽に、正直に、そして深さを持つて居ることは事實だけれど、どうか私と云ふものについて反省して見ておくれ、私を氣の毒だと思つて下さい。さうじやないの、私は此處で生れたのよ、私の父様も母様もここでくらしたのよ、それからおぢいさんも……ですから私、この家が本當に好きなの、私櫻の畑がなければ、私の生活はもう無意義なのよ、だからどうしてもここを賣らなければならないと云ふのなら、どうぞわたしも一緒に賣つて下さいな。(文雄を抱いて額に接吻して) 私の男の子供もここで溺れて死んだのですよ、(泣き乍)ね、文雄、私にやさしくして頂戴。ねえ土井」

文雄「それは僕はもう全心を傾けて御同情してゐるのです」

龍子夫人「さうさう、（手巾を出す拍子に電報を落す）私、今日は本當にもう苦るしいの、それはとても想像もつかないでせう。何の物音でも神經に障るし、音のする度に動悸がドッドッとするの、でも私默つては居られないの。私一人になつては默つて居るのが怖いのよ、だから土井、私に酷く云はないでね、私、貴方を自分の子供のやうに思つて居るの、で、いつでも貴方と愛子とを結婚させたいと思つて居るの、それは本當ですよ、だけど、貴方勉强しなければ駄目だわ、學位はせひ取つて下さいよ、學位なんかどうでも宜い實力があればなんてお考へにならないでね。さうでせう。私の云ふ通りでせう。それにその髯だつて何んとか、も少し手を入れたら宜いでせうにねえ。（笑つて）わたしあなたの顏を見てゐると笑はずにはゐられないもの」

文雄（電報を拾ひ上げて）「僕は美少年になりたくはありません」

龍子夫人「巴里から來た電報よ、もう毎日の樣に來るの、昨日も來たし、今日もこう

やつて來たの、ねえ病氣なんですつてさ、――ゆるしてくれつて、歸つて來てくれと云ふのよ、私は巴里へ行つてあの男と一緒にならなければなるまいと思ひますよ、オヤ、貴方はこわい顏をして居るのね、でも文雄、外にどうか爲やうがあつて？　ねえ考へておくれ、あの男は病氣で、一人ぼつちで、難澁してゐるといふんだもの、誰が世話してやりますか、ね、誰が馬鹿な心得ちがひをしないやうに止めますか、藥を飲む時間々々に誰が藥をのませてくれます。もうこうなつては何も恥かしがつて言はずに居ることはないわ。私あの男を愛して居るの、――私は愛してゐる。私の戀は首のまはりに石を結びつけられたようなものよ、その石はもうドン底まで私を引きづつて沈めて仕舞うのでせう。けれどね實を云へばね、その石が可愛いゝの、その石なしには生きて居られないの、（文雄の手を確と握りしめて）土井、お前私のこと惡く思はないで頂戴。何も云はないで下さい、何も云はずにね」

文雄（泣き乍）「どうか私の不躾の言葉を許して下さい。――でもその男は丸つきりあ

なたを强奪したのですもの――」

龍子夫人「いゝね、いゝね(耳をおさへて)そんなこと言ふものではないわ」

文雄「敢て申します。その男は極めて惡黨です。あなたの外の人には誰れにだつて分つてゐます。甚だ深刻なる意氣地なしの惡黨です。無賴漢です」

龍子夫人「あなたまだ二十六か七ね、まるで中學生のやうね」

文雄「それが何んです」

龍子夫人「もう一人前の男になるものよ。あなたの年頃になつたら、戀をして居る人間の心持ぐらゐ分らないと云ふことがあるもんですか。あなたは御自分で誰かと戀をして見なければ駄目よ。……さうよ。さうよ。あなたが潔白だなんて云ふものでは無いわ、唯氣取つて居るだけだわ、氣まぐれなの、――變人なんだね」

文雄「何を云ひ出したんだらふ」

龍子夫人「僕は戀愛以上に超越してるんです」だつて――あなたは房兵衛の云ふ通り出來損ひよ、お前さんの年頃で、情婦(いろ)の一人位持たないなんて、恥じやないの」

文雄(呆れかへつて)「實に驚く。何と云ふことを云ひ出したのであらふ。(兩手で頭をかゝへあわてゝ客間へ逃げ行き)どうも驚いた。とてもたまらん、歸らふ。(去る直ぐ歸つて來て)御交際もこれ限りです(去る)

龍子夫人「お待ちつたら、文雄、私冗談よ、だからお待ち!」

文雄階段をかけ下りる。――つゞいてドタンと云ふ音がする。愛子と輪喜子との叫びごゑが起り、ついで笑聲起る。

龍子夫人「どうしたの」

愛子駈けて入り、

愛子(笑つて)「文雄が梯子段から轉げ落ちたの」

龍子夫人「アラまあ! 何んておかしな人なんでせう」

驛長アーナの向うの客間の眞中に立つて、トルストイの詩、罪人を朗讀する。皆立上つて聽く。――やがてワルツの音が上がり段の間から聞ゐる。やめてしまふ。

總舞踏。文雄。愛子。輪喜子。及夫人上がり口から出てくる。

龍子夫人「サア被入い、土井、聖人さん！　先程は御免なさいよ。ねに一緒に踊りませう」

夫人、文雄と踊る。愛子輪喜子と踊る。

房兵衛入り來り杖を扉に立てかく。彌吉客間から入り來る。踊りを見て立つて居る

彌吉「どうだね、親父さん！」

房兵衛「おや、宜い氣持はしねえ、昔はここの舞踏會と云へば、大將だとか男爵だとか、司令長なんて云ふ顏振れが見えたものさ、所が、今じや郵便局長だの譯長などが招待客で、それも餘り宜い顏はしないんだからな、俺あもう体中がだるいんだのよ、大旦那樣は、おら工合が惡いと封蠟殘らず下されたが、俺あ二十年の餘も毎日封蠟を飲んでゐた。俺がこうして生きてゐるのは、多分そのおかげだらふよ」

彌吉「おいらもやりきれ無え。とつつあん、早く往生してくれ」

房兵衛「何吐かす。この出來そくないめ（口の中でゴト〳〵云ふ）

文雄と夫人、アーチの向うから踊つて居間へ出てくる。

龍子夫人「後生！　少し休ませて頂戴！（掛け乍）私疲れたわ」

愛子出てくる。

愛子（昂奮して）「櫻の畑が賣れたつて、今しがた台所へ誰か來て話して居たわ」

龍子夫人「え。賣れた。そして誰の所へ」

愛子「誰とも云はないで、もう行つて仕舞つたわ」

夫人は文雄と踊る。二人は客間の方へ歸つて行く。

彌吉「どこかの爺が喋言つてたんですよ。へえ、見知らない人間です」

房兵衛「嘉平治旦那樣がまだ戻つていらつしやらない。旦那樣は輕い合着を召していらつしやつた。風邪でも引いて歸んなさらふに、イヤハヤ、若木の森よ、綠の森よだ」

龍子夫人「私もう身体を千切られて仕舞ひさうだよ。彌吉行つて誰が買つたのか聞いて來ておくれ」

彌吉「だつて、その爺さんはとつくに行つて仕舞ひましたよ(笑ふ)
龍子夫人(急いて)何がおかしいの、え何を笑ふの」
彌吉「へえ、海老平といふ奴はおかしな奴でさ。……二十二の不仕合せでしてね」
龍子夫人「房兵衛。土地が賣れて仕舞つたら、お前何處へ行くつもりだね」
房兵衛「何處へでも行けつてね所へ參りまさあ」
龍子夫人「マアお前の顔。どうしたの、何處か加減が惡いのぢやないかい、お寢みよ」
房兵衛「ハイ、寢に行つても宜しうございますか、私が寢たならば誰が后始末をさつしやいます。私は家の中の事を一人で脊負つて居りますだよ」
彌吉「奥さま。私はお願がございます、今度も奥樣が巴里へお出の節はどうぞ私にお供をさせて下さいまし。ねえ。とてもこの土地には辛抱が出來ません、……(小聲で)御覽の通り開けない田舍ですからなあ。人氣は惡るいし、それに第一退屈で仕方がありませんや、お勝手の食ひ物と來た日にやあ、身ぶるひが出る程ですしその上房兵衛の奴が、朝から晩まで譯の分らない寢言をゴド〳〵言つて居るんで

せう、そりやとても堪つたもんじやありませんや、どうかお出での節はおつれなすつて下さいませ」
比須吉出て來る。
比須吉「いかゞです奥樣。……この間お願ひした百八十圓をお願ひ致します(踊り乍)百八十圓丈けどうぞねね」
彌吉(宜い聲で一人で唄ふ)
「ならふことなら苦るしの胸を、
割つて見せたや主さんに」
アーチの向うに鼠の高帽を冠つて、格子縞のヅボンを穿いた異樣の姿が現はれる。
飛びまわつて両腕をふるふ。「甘い、岩野、甘い」と云ふ呼びごゑする。
おつる(顔にお白粉を叩いて)「愛子嬢樣が、私に舞踏しろつと仰しやるのよ。殿方許りが多くつて女が少いのだからねね、けれど私踊ると目まひがして心臟がドキドキしてよ、房兵衛さん今しがた郵便局のお客樣が私にやさしい言葉をかけて下す

つたわ、本當にやさしい言葉をねに、私、スーッと息がつまるやうに思つたのよ」

房兵衛「あの人は何を云つたかね」

おつる「お前さんは國にさく花のやうだつて」

彌吉（欠呻して）「エヽ下らない（去る）

おつる「おゝ嬉れしい、國の花のやうだつてさ、まあ、私、そんなに貴婦人らしくそして上品なんだと見にるわ、ね、そんなことときくとボーッとして仕舞つてよ」

房兵衛「手前も錄なものにはなれない」

海老平入り來る。

海老平「おつる嬢お前は私の顏を見るのも厭がつて居るだらふねね、蟲けらか何んぞのやうに（溜息して）ああ人生よ、人生よ」

おつる「何か御用なの」

海老平「恐らくお前は正しいよ。もし率直に云ふことを許るして貰へば貴方は結局私とある心持にならせて仕舞つたのですよ。私は私自身運命を深く自覺して居ます——私には毎日毎日何かしら災難が起つてくる。私は長い間それに馴れ切つて居るから、この頃は運命に對して微笑を以つて向つて行くつもりです。あなたは私に云つたことがあるね」

おつる「お願ひですわ。此度の話にして頂戴！　今はそつとして置いて下さいな、私いろ〳〵と考へてることがあるんですから、ね、（扇をもてあそぶ）

海老平「毎日毎日、何かしら不幸が私の上に落かゝるが、私は敢て悲觀を用ゐない、微笑を以つて、いや洪笑を以つてむかへようとつとめて居る」

輪喜子入り來る。

輪言子（海老平に）「海老平、お前まだそんな所に愚圖附いてるの、（おつるに）おつる彼方へお出でなさい（海老平に）いゝ歳をして玉突の棒を折つてしまつたり、お客樣のやうに室の中を歩るき廻つたり、何だね」

海老平「矢禮乍、貴女は私に小言を仰しやる資格がないでせう」

輪喜子「私、小言ではないわ、話しをしてるのよ、お前の出來ることなら部屋をのそ

り〳〵歩るくだけのことじやないかい、一体何んのために書記を雇つて置くとお思ひ？」

海老平（憤つとして）「私が動かうと動くまいと、フラ〳〵歩かうと歩くまいと、物を食べようと、玉を突かうと、そうした事は目上の方に、もつと物の分つた方から極めて頂く問題かと思ひます」

輪喜子（憤つて）「何んと云ふ不從順な人でせう。そしてよくそんなことが言へたもんだよ、私、ものが分らないと云うの、直く出て行つておくれ、今直ぐ出て行つておくれ、出て行け」

海老平「どうかも少し温情的に、そして優しく仰言つて下さい」

輪喜子（夢中になつて）「サア出て行け、出て行かないか、二十二の不仕合奴、私の目につかないやうにしておくれ」

（海老平去る）

海老平「あなたのことを宜く申し上げて來ますから」

輪喜子「何んだへ、また歸つて來たの此奴、サア來い、（房兵衛が立てかけて置いた杖をとつて）サア來い、來るなら來て見ろ、酷い目に合してやるから、サア來い」

魯馬吉入り來る、杖當る。

魯馬吉「ヤッ、どうもこれは恐れ入る、痛み入ります」

輪喜子（憤とけず）「どうもお氣の毒樣ね」

魯馬吉「どうし致まして、ヘエ、ヘエ、お手厚いお出迎へで恐縮いたします」

輪喜子「お禮などいらないことよ（歩るいて、振りかへつて優しい聲で）でも痛みやむしなくつて？」

魯馬吉「何、大したことはありません、ことによつたら鶯鳥の卵位の瘤がとび出す位のものです」

客間に人々の聲「比須吉さんが來てよ」

比須吉「目にも見えたよ、耳にも聽えたか（魯馬吉を接吻する）コニヤックくさいぞ、親父、此方でも大に愉快にさつたところさ」

夫人出てくる。

龍子夫人「ママ來てくれたの、比須吉さん、どうしてこんなに遲かつたの、兄い樣はどうして」

魯馬吉『嘉平治旦那さまは御一緒にお歸りですよ、追つけ見にるでせう」

龍子夫人（昂奮して）「どんな樣子だつた、え賣れてしまつたの、さあ聞かしてよね、聞かしてよ」

魯馬吉（心の喜悅を抑へようとして）「競賣は四時にすつかり濟みました。滊車にのり遲れたため八時半まで待たされた、何んたか目まひがする」

嘉平治入り來る。片手に包、片手に涙を拭いてゐる。

龍子夫人「兄樣、どうしたの、早く、早く話して下さい、后生ですから」

嘉平次（手を上下にあげ身振りし乍ら泣き聲で）「アゝどうもひとく疲れて仕舞つた。どうも實に偉い目に逢つたぞ。（玉突部屋の開放した扉から玉を突く音がする、彌吉の聲で「七、十八」と云ふ聲がきこえる、嘉平治顏色が變る、泣き止まる）私は實に疲れた。房兵衛着換へさせてくれ」

客間を拔けて出て行く。房兵衛後からついて行く。

比須吉「競賣の方はどうでしたな、サア話して下さい」

龍子夫人「誰が買つたの」

魯馬吉「私です。——（夫人顚倒してしまふ。危うく床の上に顚倒してしまふを、漸うく傍の椅子や卓に支へられる）私が買つたのです。どうか急かないで云はして下さい。私の頭は渦を卷いてゐる。私は口がきかれない。（笑ひ出し）私が競賣場へ行つたとき、喜平次さんも來て居ました、財產家の出里賀ももう來て居ました。で喜平治さんは一万五千圓しか持つて居ないんです。漸々競賣が初まると、出里賀は突然抵當額の上三万圓糶りました。

私はそいつの向うにでて四万圓を出した、彼奴は四万五千圓を出した。私は五万五千圓にせつた。つまり向うが五千圓五千圓とせり行くのに私は、一万圓、一万圓とせり上げた。ですぐとバタ〳〵と片が附いたのでした。結局私は抵當金額の

九万圓出して私の手に落したのです。

これで櫻の畑は私の物です・お前は醉拂ひと云はれても宜しい。お前の頭はどうかして居ると云はれても宜しい。皆な夢だと云はれても宜しい。私は願つてる、私の親父と、私の祖父さんと、墓の中から出て來て、この一件を見て貰ひたい。

魯馬吉が散々棒で打ちたゝかれたが、分らずやの魯馬吉が冬の寒空に跣で駈けまはつて居た愚かさを見て貰ひた。いその魯馬吉が世界に比べる事の出來ない美しい、大きな櫻畑をどうして買つたかを見て貰ひたい。私の今日買つた土地には、親父も祖父も昔奴隷として働いて居ました。そこの台所にさへ入ることが出來ない程の身分であつた。あゝ夢のやうだ。本當の事ではない樣だ。(鍵の束をとり上げてニコ〳〵し乍)あの人は鍵を拋り出し乍行つた。もう自分はこの邸のお上さんでないと云ふ意味だな。(ガチャ〳〵させて見て)何んでも宜い、〳〵(樂隊の調子に合せ乍)サアヤレ〳〵樂隊さん、確り賑はしくやつてくれ、サア誰もみんな來て魯馬吉さんが櫻の園に斧を入れる所を見てくれ。大きな木のブッ倒れる所を

見てくれ。今にこの邊は別莊で埋まる。そして俺の孫か曾孫はここで新しい生活をするのだ。サアやれやれ、でかく調子を揚げて音樂をやつてくれ』

音樂はじまる、夫人椅子につつ伏して泣く。

魯馬吉「あゝなぜ貴女は私の云ふことをきいてくれなかつたのです。誇りのある櫻の畑がこうなつてもなほそこに誇が有りますがな、氣の毒だが時計の針はもう后へはもどりません(泣き乍)あゝ何もかも終つた。われ〳〵の調子の違つた生活は早く變はつてくれ』

魯馬吉(魯馬吉の腕をとつて小聲で)「奥さんは泣いて居なさる、さあ俺達は客間の方へ行かう——ここは奥さん一人にして置く方が宜い』

腕をとつて客間へ行かうとする。

魯馬吉「どうしたんだ。サア確りやつてくれ。オイ樂隊、樂隊、何んでもおれの思ふ通りやつてくれ、俺の喜ぶやうにやつてくれ。新しい殿樣がお出でなすつたんだ櫻の畑の新らしい持主が來たんだ。(過つて卓に打ちつかり燭台を落しさうにす

る）構うもんか、何んでも俺が拂つてやる」

魯馬吉、魯馬吉出て行く。客間にも居間にも人影なく、夫人一人となる。痛ましく泣き入る。樂隊は低く奏樂する。

愛子と文雄と入り來る。愛子は母の傍へ行きその前に跪く。文雄客間の入口に立つ

愛子「母樣！　泣いて居らつしやるの、私の好きな優しい母樣！　私母樣を愛してよ母樣を祝福してよ。母樣、櫻の畑は賣られて仕舞つたわ。無くなつて仕舞つたわそれはもう本當なの、本當にさうなの、けれど泣かないでね。母樣、貴方の前には、また生活があるのよ、純潔な、やさしい靈魂がまだあるのよ、ね、母樣、私と一緒に行きませう。

一所にこゝから離れませう。そして私達はこゝよりももつとづゝと新しい花園を作らへませう。母樣、それはよく見えもし、分つても居るのねえ。そして未來には大きな幸福が、深い、靜かな幸福が、夕暮の太陽のやうに美しく、母樣のお心の底に染み込んで行くでせう。屹度母樣を喜ばしてよ、さあ私と一緒に行きませう——ねね。

——幕——

‖第四幕‖

第一幕と全じ場所。たゞ窓に窓掛なく額なく、家具は賣らるゝ爲に隅の方に重ねられてゐる。ガランとした感じを生ず。廣間へ行く扉にや舞台の奥、旅の荷物と行李とが積推して居る。輪喜子と愛子の聲す。魯馬吉は立つて出づるを待つ、海老平は入口の近くに箱を持つて居る、奥の遠くにお別れの挨拶に來た農民の聲がする。

嘉平治（外で）「有り難う、どうも有り難う」

彌吉「百姓共が挨拶を云ひに來た。エ、私の考へではあの魯馬吉の奴善い人間だが、マア馬鹿だな」

夫人と嘉平治入り來る。夫人は泣くかはりに青ざめた顔が引きしまり口が利けずに居る。

嘉平治「龍子、お前またあれらにお金をやつたのだな」

龍子夫人「でも遣らずにはゐられなかつたのよ、……（二人出て行く）」

魯馬吉（戸口から夫人を呼びかけ）「何卒、此方へいらつしつて下さい。え、いらつしつて下にい。お別れに一寸一盃さし上げたいと思ひます。やつと停車場で一本見附けて來た奴があるんです、さあどうです——え、お厭ですか、——さうと知つたら買うて來るんぢやなかつた。では私も飲まずと宜えわ、（彌吉に）彌吉。貴樣飲れよ」

彌吉「では遠慮なくやりますせ、旅立を祝し、後の人達の幸福を祈ります、ヤツ、これは本當のシャンペンじやありませんな、確に」

魯馬吉「一本八圓した——どうも酷くこの部屋は寒いぞ」

彌吉「今日は火を焚かないんでさあ、どうせ皆な出立するんでさあ」

魯馬吉「今はもう十月だと云ふが眞夏のやうに靜かで日かカン〳〵して居る、普請には持つてこいの日和だ（時計を出して）氣を附けて下さい、瀛車の來るまでに四十

七分しか無いのですから、二十分したら停車場へ出かけなけりやなりませんせ、早くなさい」

文雄、外套を着て戸外から入つてくる。

文雄「もう出かける時刻だらふね、馬車の支度は出來て居る。所で僕のオバーシューズは何處へ行つた、無くなつたかな、愛子、僕のオバーシューズが見ゑません、何處を探しても見ゑないよ」

魯馬吉「私もハルコフまで行くんだ、君と一緒の汽車で行く、そしてこの冬はハルコフで送らふと思つてゐる。隨分長い間君達と共にブラ〳〵してしまつた。爲す事もしないで、頭が腐つて仕舞つたよ、私は爲すこともなくては生きて居られない兩手をどうして置いていゝか分らない、ブラリとさがつて居る手は自分の手の樣でもない」

文雄「さう云はん方が宜い、僕達が出かけて行つたら、後では精々君の有用なる仕事をするが宜い」

魯馬吉「一杯どうですか」

文雄「僕は澤山だ」

魯馬吉「君はモスクワへ行くのかい」

文雄「皆樣を送つて行くつもりだ」

魯馬吉「フム、多分大學の先生達が君の來るまで講義を初めずに待つて居るだらふからな」

文雄「餘計なお世話を燒くな」

魯馬吉「一体、君は何年間、大學に居るのだい」

文雄「何んとでも新らしい冗談を考へ出すが宜いや、そんなシャレは古いぞ（オバーシウズを探す）オイ僕等はこれつ切り逢うこともあるまいからお別れに一言忠告して置く、それは君の兩手を振り廻すなつてゐことだ、別莊を立てるとか、その別莊の借主が將來、小さい財産家になるだらふと云ふ豫側をしたりする、そんなことを總て兩手を振り廻すと云うんだ。――だけど僕は君が好きだ、なぜと云へ

ば君は細い。君はやさしい。美術家らしい手をして居る、それから心持にもやさしい所があるよ」

魯馬吉（文雄を抱擁して）「ぢやあ左樣なら。私の友だち、種々君に感謝する、エ、旅行に要るのなら、少し金を持つて行かないかい」

文雄「何んだと――僕は金は要らん」

魯馬吉「でも無いだらふに……」

文雄「ウム、持つて居るよ、有り難う。飜譯でゑた金がここにある――ほらこの通り……だがオヴアーシューズが見えない」

輪喜子（隣窓から）「さあこの小汚いものを持つて行つて下さいよ」

オバーシューズを舞台の上に拋り出す。

文雄「どうしてそんなに機嫌を損じて居るんだい――輪喜子、これは僕のじやない」

魯馬吉「この春な、私は罌粟を三千町歩播いた。スルトそれから純益四萬圓上つた。その罌粟の咲いた頃は隨分美しかつたせ、さう云ふわけで四萬圓たゞ上つたのさだからその儲けを君に少しあげ樣としたんさ。ねえ君痩加慢したつてつまらんじやないか、……私は百姓だ、何處までもムキ出しのまゝで行くのだ」

文雄「君の親父が百姓なら　僕の親父は藥劑師だ。それがどう云ふ事になる。（魯馬吉金の入つた財布を出す）止し給へ、止し給へ、よしんば二十萬圓出したつて僕はとらんから、僕は自由の人間だ、君達が、君達の統てが、非常に大事がつて騷ぐものが、僕にとつてはこれん許りの威力も無い。たとへて云へば、風に舞つて行く綿毛のやうなものさ、君達に借らいでも僕はやつて行ける、僕は強いつもりだ甚だ高慢だ、人間は最高の眞理に向つて前進する、地上の最高の幸福に向つて前進する、そして僕はその先頭に立つて進んで行く」

魯馬吉「フム、では君は目的に行きつけると思うのかい」

文雄「それは僕自身が目的地へ行くか、それとも他人に行く道を敎へてやるかする」

木を伐る音が遠方で聞える。

魯馬吉「ちや、君左樣なら！　もう立つ時刻だ、斯うしてお互が威張り合つて居た所

が仕方が無いよ、ねえ生活は絶えず我々に構はず過ぎて行く。私なぞは長い時間疲勞も知らずに働き通した后では心が輕くなつた樣に覺えるね、そして自分の生存する意味が分るやうな氣がするよ、――まあどうでも宜いや、それがために爲る事に對してかはりは無いのだからね、爲る事と云へば嘉平治さんは、爲る事が見つかつた相だね、銀行へ六千圓の給金で出るさうだが、長く續いてくれれば宜いが、何しろ彼の人は懶け者だからな」

愛子「母樣が云つてよ、ねえ木を伐るのは立つてから后でして下さいつて」

文雄「全くさうだ、餘り氣が利かな過ぎるじやないかね」

魯馬吉「無論だ、氣が附かなかつた、何んて馬鹿な眞似をしたんだらふ。(文雄の后から出て行く)

海老平「あの百歳の友人は私の結論する所によればもう繕ひは利きませんな、どの道先祖の所へ歸つて行くでせう。私はあの男がいつも羨ましいと云ふことだ(行李を手箱の上にのせる、箱がペチャンコにつぶれる)ほら又初まつた。どうもこんなことになるだらふと思つた(出て行く)

彌吉(冷笑)「二十二の不仕合め」

輪喜子「房兵衛は病院へやつてくれたつて」

愛子「えゝ」

輪喜子「彌吉どうして、母樣がお別れに逢ひに來てよ」

彌吉「もうやり切れねえ」

おつる荷物のそばで働いて居た、輪喜子、愛子去ると傍へよつて來て、

おつる「よう、彌吉、一度位、私の方を向いてくれたつて。よさそうなものねえ、あんた行つて仕舞うんだつて」

泣き乍兩腕を首にかける。

彌吉「泣くない(シャンパンを飲み乍)明日特急でポーッと出掛る、六日經ちや巴里へ歸れるんだ。さゝすればそれでお仕舞、何んだか嘘見たいだ。ウイブ・ラ・フランス!(佛蘭西万歳)こんな田舍は俺には不向だ、こんな田舍はつく〴〵厭だ、(